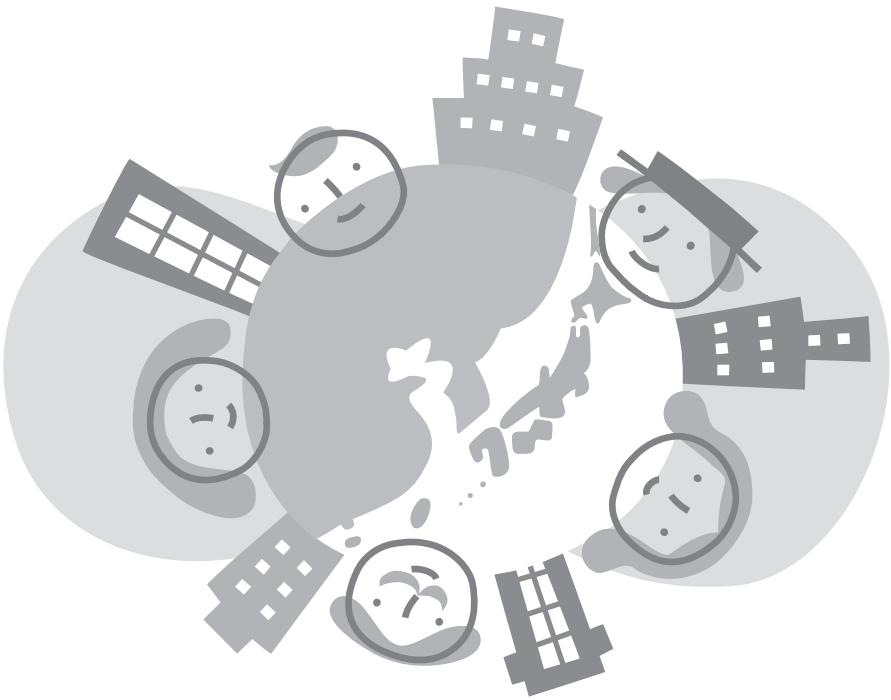
PART 2

各都市の調査結果の特徴

李　基淑（ソウル）
張　燕（北　京）
朱　家雄（上　海）
蔡　春美（台　北）



1

ソウルの結果と分析

李　基淑（梨花女子大学校幼児教育学科教授）

１．調査対象となる幼児の一般生活の背景

（１）一般的な背景と基本生活実態

ソウル市と京畿道の韓国の首都圏にある幼稚園と保育施設の計31か所に通う３～６歳の幼児から回収された941人を対象として幼児の生活の実態について分析した。

本調査の調査対象となった幼児たちは、男子と女子の割合がそれぞれ半数であり、幼稚園と保育施設にそれぞれ41.3%、57.5%が就園している。調査票の大部分は幼児の母親が回答し（92.4%）、第１子は60.9%で、きょうだい数は２人が65.3%だった（p. 8 図Ａ－３～５、p. 9 図Ｂ－１）。

両親の年齢は大部分が30代で、父親の場合、「36～40歳」が42.6%、「31～35歳」が38.1%だった。母親の年齢は「31～35歳」が56.7%で最も多く、次いで「36～40歳」が24.7%だった。父親の学歴は四年制大学卒業が46.7%で最も多く、母親の学歴は高等学校卒業が38.8%、短期大学卒業以上（「短期大学」＋「四年制大学」＋「大学院」）が58.2%だった（p.10 図Ｂ－２～３、p.11 表Ｂ－２～３）。

家族構成は核家族が全体の71.1%であり、母親の職業は「専業主婦」が50.8%で、「常勤（フルタイム）」「パートタイム」「フリー（在宅ワークを含む）」などの職業を持っている母親は合計で38.7%だった。常勤やパートタイムで働いている母親の労働日数は「週５日」が38.5%、「週６日」が38.7%で、大部分が週５、６日勤務である。就業している母親の場合、午後６時に帰宅する母親が23.6%で、午後７時に帰宅する母親も14.3%いた（p.11 表Ｃ－１、p.10 表Ｂ－１、p.175 基礎集計表）。

また、家でインターネットを１週間に５日以上使う保護者が30.3%で最も多かった（p.11 図Ｃ－１）。少なくともインターネットを１週間に１回以上使う家族は78.6%にのぼる。これは韓国の超高速インターネットの普及率がOECD諸国の中で第１位を占めていることを反映したもので、現代の韓国社会でのインターネット使用は、家庭生活でもなくてはならないものになっている。また、家族の平均月収は、「201～300万ウォン」の家庭が24.2%、「301～400万ウォン」の家庭が23.2%、「101～200万ウォン」の家庭が14.0%であった（p.183 基礎集計表）。都市部の平均月収が2005年度の第１四半期現在で3,291,216ウォン（韓国統計庁）であることを考えると、サンプルではかなり平均して分布しているといえる。

幼児は、大部分が「７時半～８時頃」の間に起き（61.8%）、「８時～８時半頃」に朝食を食べ（62.9%）、「19時～19時半頃」に夕食を食べ（60.3%）、「21時半～22時頃」に就寝している（50.2%）。このように幼児の就寝時刻が「22時頃」以降の場合が全体の61.7%

で、「23時頃」以降の場合（16.9%）も相当数あった（p.46 図1－1－1、p.47 図1－1－3～6）。

（2）早期教育の実情

幼児の中で72.6%が課外活動（習い事）をしており、とくに年齢が高くなるほど課外活動をする比率が高くなった（3歳児60.3%、4歳児67.2%、5歳児78.8%、6歳児84.0%）（p.54 表1－2－1）。課外活動の種類としては、調査対象幼児の53.0%が「学習誌（ハングル、算数など）」による勉強を行い、その次に「絵画・造形教室」16.1%、そして「英会話などの語学学院」11.2%などが多くみられた（p.55 図1－2－1）。この結果は、英才教育の実態を調べた先行研究の結果とも類似している（金ヒョンジョン 2003、朴スジン 2001、李基淑 2001）。

このようにソウルにおいて学習誌が普遍的に使用されている理由は、学習誌の購買者である親すなわち、母親たちの口コミおよび販売員や周りの他の親などを通して気軽く接することができることと、学習誌の購買価額が安いことが大きな理由である。そして、小学校の学習と関連した基礎能力の向上に役立つと思われているからだと考えられる。

韓国では学習誌とともに、ガーベ（恩物）、積み木、モンテッソリなどが母親たちの間で流行している。それはこのようなプログラムも学習誌同様に、教師がガーベ（恩物）やブロックなどの高額の教具を持ち、直接幼児のいる家庭に訪問し、幼児たちにプログラムを提供するからである。

（3）メディアとの関係

幼児たちは「ほとんど毎日」テレビを視聴し（79.2%）、「ごくたまに」ビデオとDVD（VCD）を見て（「ビデオ」40.5%、「DVD（VCD）」21.2%）、57.5%の幼児が「ほとんど毎日」絵本を読んでいる。学習誌による勉強は、「週に1～2日」25.1%、「ほとんど毎日」21.4%、「週に3～4日」16.7%の順であった。しかし、ゲームの場合には、「ぜんぜん使わない・使わせない」が28.2%で、「ごくたまに」するという回答が12.7%であった。パソコンの場合は、「週に1～2日」使用するが20.3%、「ごくたまに」使うが22.2%であった。また、学習開発用機器や知能開発玩具の場合、「家にない」という回答が23.8%であり、「ごくたまに」使用するという場合も21.2%であった（p.170 基礎集計表）。

ソウルでは、DVD（VCD）の使用頻度に関する項目で「無答不明」が多かった。その理由は韓国のDVD（VCD）の普及率がまだ0.2%にすぎないからだと思われる（韓国経済新聞 2000）。また、幼児用を含む多様なDVD（VCD）タイトルがアメリカ、日本、中国などに比べ、普及されていないことに起因しているかもしれない。

さらに、研究の結果によると、韓国の幼児は多くの時間、パソコンをしながら過ごしていた。先行研究によると、韓国の幼児はコンピュータを使用する際、娯楽用CD（58.4%）、学習用CD（16.7%）、インターネット（16.8%）などで使っていることがわかった（金ヒョンジョン 2003）。

テレビ・ビデオ・DVD（VCD）の視聴時間をみると、1日のうち、テレビは1日に「1時間台」が28.5%、「2時間台」が27.0%、「3時間以上」も33.0%で、約9割の幼児が1時間以上テレビを見ていることがわかる。また、ビデオは「1時間」が30.1%で最も多かったが、DVD（VCD）は「30分未満」が19.6%で最も多く、「無答不明」が51.2%であった（p.171 基礎集計表）。

テレビやビデオを見るときの幼児たちの様子については、「見ているとき、家族の方と目をあわせること」では「よくある」が41.5%で最も多く、「見ているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりすること」と「見ているとき、内容について、子ども自身がお話をすること」では、両方とも「よくある」という

回答がそれぞれ44.1%、55.9%と最も多かった。「見終わった後、家族と内容について、話をすること」では「ときどきある」が35.7%、「よくある」が34.7%の順であった（p.172 基礎集計表）。

このような結果からは、テレビとビデオを含めた電子機器を使用するとき、比較的両親や家族とかかわりを持ちながら見ていることがわかる。

２．子育てと教育に対する母親の意識

（１）子育てで重視していること

母親たちが、実際の子育てでどのような内容を重視しているのかをみると、「とても重視している」で最も多くの回答があったものは、「基本的生活習慣を身につけること」65.8%、「自然とたくさんふれあうこと」59.3%、「親と過ごすこと」55.9%、「身体を丈夫にすること」72.2%、「他者への思いやりを持つこと」60.6%、「関心や才能を支援すること（体験活動など）」49.1%の項目であった。また養育時に「まあ重視している」比率では、「屋外で遊ぶこと」が64.9%で最も多く、「数や文字を学ぶこと」60.9%、「外国語を学ぶこと」57.6%、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」65.2%などの項目が示された（p.172 基礎集計表）。

（２）子どもに将来なってほしいと思っている人物像

将来、子どもたちにどのような人になってほしいかについての質問では（p.73 図２－２－１）、「自分の家族を大切にする人」になってほしいという回答が69.2%で最も多く、次に「リーダーシップのある人」が46.8%、「精神的に余裕をもってゆっくり生きる人」（東京、北京、上海、台北では「のんびりと生きる人」となっている）が32.2%、「まわりから尊敬される人」が28.3%、「他人に迷惑をかけない人」が24.7%、「仕事で能力を発揮する人」21.2%、「経済的に豊かな人」が20.2%の順であった。

ソウルの母親が「リーダーシップのある人」という項目を多く選択した理由としては、韓国の社会、政治、経済など、各分野の変化と関連しているようである。現在、韓国では政治、経済分野において世代交替が行われているので、新聞、メディア、インターネットなどのマスメディアにより、リーダーシップと関連のある談論が多く提起されている。また、歴史上（古典）の人物を基にしたテレビドラマが流行し、古典人物らのリーダーシップが現代で再解釈されている。代表的な例として、平均 22.1%の視聴率を記録した李舜臣将軍を主人公とする大河史劇が多様な階層の視聴者より多くの支持を得、以降李舜臣将軍のリーダーシップに対する各種の書籍が出版された。

そして、ソウルの母親は東京、北京、上海、台北の母親たちとは異なり、自分の子どもが「精神的に余裕をもってゆっくり生きる人」として成長することを希望している。これは現代資本主義社会がそうであるように、韓国社会も競争的で成就志向的な社会であるため、幼児期から子どもたちが各種の競争にさらされることで、母親たちは逆に子どもに対して、精神的に余裕を持てるおとなに成長してほしいと願っているのではないだろうか。

（３）教育観と課外教育費

子どもをどこまで進学させたいかという質問では（p.77 図２－４－１）、「大学卒業まで」が50.0%で最も多かったが、「大学院卒業まで」も46.0%あった。

すなわち、大部分のソウルの親たちは、子

どもたちが大学卒業以上進学することを希望していることがわかる。韓国はアジアの諸国がそうであるように、教育熱がとても高く、高学歴社会である。現在韓国では、大学卒業の青年たちの就業難が社会的に大きな問題となり、青年失業という用語まで生まれてきた。このような就業難が深刻化し、求職者たちの自己能力を見せる道具として学歴を利用しようという趨勢が強まり、さらに上の段階の学校への進学率が高くなっている（朴ソンジュン、2005）。そして、社会的な圧力が幼児をもつ親たちにも影響を及ぼし、韓国の幼児の親たちは他の諸国に比べ、子どもの超高学歴への志向が強い傾向にある。

また、１か月間に課外活動にかかる費用（幼稚園・保育施設にかかる費用を除いた、1か月あたりの塾・習い事（個人レッスンを含む）・絵本・玩具にかかる費用）は、回答者の26.5%が「５～10万ウォン未満」であると回答し、「３～５万ウォン未満」が19.7%、「10～15万ウォン未満」が17.3%の順であった（p.174 基礎集計表）。

これを都市の平均月収に対する割合でみると、所得の約２～３%を子どもの課外活動費用に使用していることがわかる。

（４）子育てに関する意識

母親の子育て意識について調べた結果は次のとおりである。子育てへの肯定的な感情についての項目をみると、「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」に、それぞれ64.7%、50.8%、60.9%の母親が「よくある」と回答し、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」では、「よくある」が38.9%、「ときどきある」は50.2%が回答した。「子育てによって自分も成長していると感じること」についても、「よくある」が40.7%、「ときどきある」は42.2%の意見であった。一方、子育てへの否定的な感情についての項目をみると、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」や「子どもに八つ当たりしたくなること」という質問では、「あまりない」がそれぞれ36.3%、37.2%の回答があった。しかし、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」や「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」では「ときどきある」が、それぞれ51.6%と41.2%であった（p.175 基礎集計表）。

母親たちは、現在の生活において「まあ満足している」が68.3%であり（p.83 図２－６－１）、現在の子どもの成長の姿に対する満足度も「まあ満足している」が62.5%で（p.84 図２－６－２）、大部分が現在の自分の生活と子どもの成長に満足している。

子どもの性格について質問した結果、大部分の母親は、子どもは屋外で遊ぶことが好きで、積極的に好きなことをし、自分の意見を貫いて、だれとも仲良くし、友だちと一緒に遊ぶことを好み、人と話すことが大好きであると思っており、家で遊び、おとなの言うことをよく聞き、遊び方をそれなりに工夫していると思っていた（**表１**）。すなわち、母親たちは子どもたちを非常に肯定的に認識している。「がまん強い」「１人で遊ぶのが好き」などや「ものごとにあまりこだわらない」という質問には、「あまりそうではない」という意見が多かった（p.181 基礎集計表）。

母親が子育てに関してどのような考えを持っているかをたずねた。子育てと自分の生き方について、母親は、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」という意見が52.7%であり、「子どものためには、自分ががまんするのはしかたない」という意見も45.7%であった（p.70 図２－１－１②）。

このような結果は、ソウルの母親たちが子育てについて肯定的に考えていることを示し、同時に母親役割以外の一個人としての自己実現も重要視していることを示している。これは韓国の既婚女性の社会・経済活動への参加の割合が高くなっている傾向とも関連が

あると推測される。この２つの役割が同時に求められると、母親としての役割がさらに優先視されているという点は、金ミシュク（1993）が指摘したように「韓国社会は夫婦中心である西欧社会とは違い、子ども中心の家族形態であり、女性に与えられたさまざまな役割のなかで、母親としての役割が最も重要であるという社会の雰囲気」（尹テクリム、1996）がよく反映されている結果であるといえる。

子育て観についてたずねたところ、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」という意見が74.9％で、「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」という意見の24.1％よりはるかに高かった（p.70 図２－１－１①）。回答した母親の31.0％が「常勤（フルタイム）」、または「パートタイム」で働いている母親であるという点を考慮すれば、母親の就業の如何にかかわらず、多数の母親が幼い年齢の子どもには母親が直接育てたほうがよいと思っており、これは子育ての主な責任者は母親であるという社会的規範に対して、母親も同意していることを意味する。

子どもの教育については、「子どもの教育について、子どもの自主性を重んじるのがよい」が71.8％で、「子どもの教育について、親が判断して選ぶのがよい」25.4％という意見より高かった（p.70 図２－１－１④）。子どもの進学に対する意見では「大学進学や学校名にはこだわらない」という意見が57.3％だったが、「世間で名の通った大学に通ってほしい」という意見も41.2％であった（p.71 図２－１－１⑦）。子どものしつけに関しては、「わがままを言ったら、厳しくしかりつけるのがよい」68.1％で、「わがままを言ったら、分かるまでやさしく言い聞かせるのがよい」30.0％であった（p.71 図２－１－１⑤）。昔から韓国では、厳父慈母という言葉があり、これは厳しい父親と慈しみ深い母親を意味する。しかし、核家族化が進み、家庭内の母親の影響力が相対的に増加する現代社会では、慈父厳母のタイプが多くなっている。また、韓国のことわざには「可愛い子には鞭をもう１回、憎い子には餅をもう１つあげる」がある。これは、韓国における育児の価値観として、両親のうちだれかは厳しい役割を果たすべきであり、子どもへの愛とともに厳しい教育も大変重要視されていることをあらわしている。

子どもの能力に関する質問では、「子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う」という意見（92.7％）が、「子どもは生まれつき能力が決まっていると思う」という意見（5.9％）より圧倒的に多かった（p.70 図２－１－１③）。先天的な能力より後天的な環境が及ぼす影響を重要視しており、母親のこのような考えは、この調査で示された幼児たちのさまざまな早期教育の取り組みに反映されていると思われる。しかし、子どもの早期教育に関する質問では、「文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるのがよい」85.2％が、「文字や数はできるだけ早く教えるのがよい」13.6％の回答よりはるかに高い結果となった（p.71 図２－１－１⑥）。

■表1　子どもの性格

（%）

	東京（1007人）	ソウル（941人）	北京（992人）	上海（935人）	台北（2259人）	最大値ー最小値
自分のやりたいことは積極的にやる	95.1	91.8	93.3	95.5	96.1	4.3
友だちと一緒に遊ぶのが好き	93.1	93.8	92.6	92.9	95.7	3.1
外に出て遊ぶのが好き	92.1	87.8	93.2	94.1	97.6	9.8
人と話をするのが好き	91.3	78.2	83.5	86.6	92.4	14.2
自分なりに工夫して遊び方を変える	85.5	83.9	84.9	89.6	88.3	5.7
自分の意見を通す	81.6	78.7	86.6	89.7	92.9	14.2
家の中で遊ぶのが好き	81.5	67.0	69.9	76.4	87.1	20.1
おとなの言うことをよく聞く	72.4	76.8	58.0	57.8	71.6	19.0
誰とでもすぐ仲よくなれる	71.9	69.4	80.9	81.5	86.3	16.9
がまん強い	54.6	41.8	54.1	54.8	57.0	15.2
ものごとにあまりこだわらない	53.4	46.6	76.5	72.7	80.2	33.6
１人で遊ぶのが好き	42.8	22.8	27.1	28.3	46.0	23.2

注1）「とてもそう」＋「まあそう」の%。
注2）――は都市別にみたときの最大値、-----は最小値を示す。

３．父親のかかわり

（１）父親の帰宅時刻

父親の平均的な帰宅時刻は、「20時台」が19.4%で最も多く、次に「21時台」が15.9%であった。「22時台」も11.6%であった（p.87 図３－１－１）。

本調査で家族の夕食時刻が「19時半頃」であったことを考えると、幼児たちの夕食が父親と別々であることを示している。

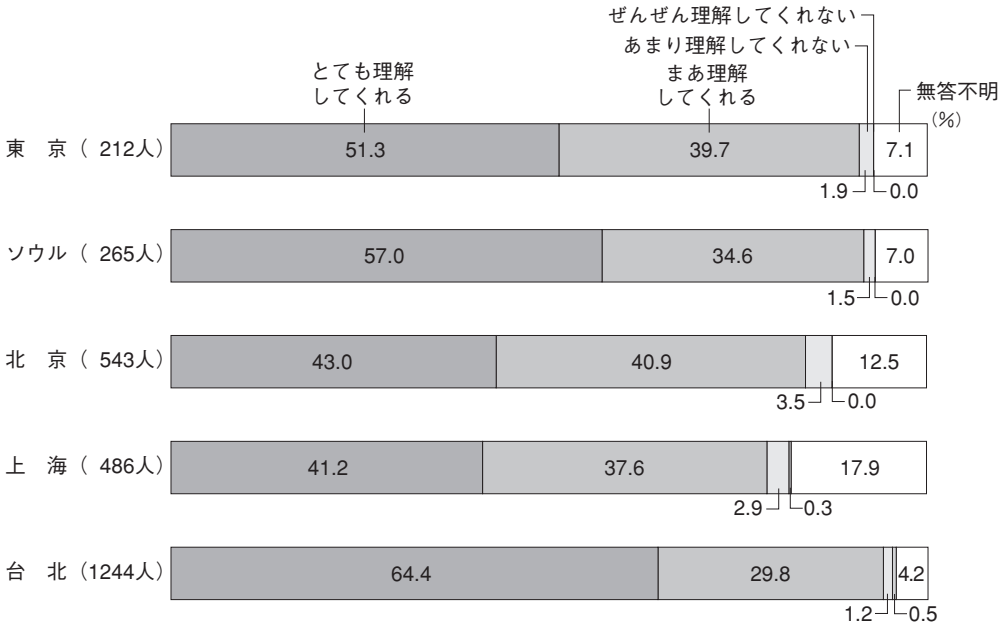
（２）父親の家事および育児への参加実態

父親が日常生活でどのような家事、育児をしているのかをみると、「子どもが病気の時、面倒を見る」では「ときどきする」が最も多く、「買い物をする」57.0%（「週に１～２回する」比率、以下同様）、「掃除をする」45.2%、「ごみを出す」41.3%、「子どもと一緒に外で遊ぶ」53.4%、「子どもを叱ったり、ほめたりする」43.1%では「週に１～２回する」が最も多かった。しかし、「食事のしたくをする」65.2%、「食事の後片付けをする」50.5%、「子どもを寝かしつける」42.9%は、「ほとんどしない」が最も多い回答であった（p.177 基礎集計表）。

働く母親の仕事についての父親の理解度をみると、大部分の父親が理解している。すなわち、父親は「とても理解してくれる」57.0%と答え、「まあ理解してくれる」という回答も34.6%であった（**図１**）。

■図１　夫の仕事への理解度

●夫はあなたが仕事を持つことをどの程度理解してくれますか



注）常勤者、パートタイムの母親の回答のみ分析。

（３）父親の家事および育児への参加の満足度と希望

父親の育児参加に対する母親の満足度は次のとおりである。母親は、47.3%が「まあ満足している」と回答しており（p.94 図３－３－3)、父親が育児にもっと参加することを望むかという質問でも（p.94 図３－３－４)、「まあそう思う」という回答が58.7%と最も多かった。

また父親たちの家事参加に対する満足度においても、45.8%が「まあ満足している」と回答しており（p.94 図３－３－１)、もっと家事に参加することを望むかという質問には、「まあそう思う」が53.1%と最も多くの回答があった（p.94 図３－３－２)。

父親たちが育児と家事に参加する比率が過去に比べて増加しており、これに対する母親の満足度も過去に比べて高くなっていることが推測される。それにもかかわらず、父親たちにもっと育児および家事に参加してほしいと希望している母親の回答が多かったのは、いまだに父親たちの家事・育児への参加が母親の補助的な役割だけに限られているため、父親にもっと積極的で自発的な参加を希望しているのであろう。

４．子育て支援

（１）子どもの面倒を見てくれる人

母親が仕事以外で、家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）がいる（ある）かという質問に、64.9%が「いる（ある)」と回答したが、一方で30.1%は「いない（ない)」と回答している（p.98 図４－１－１)。実際、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）をみると、「祖父母や親戚」が73.8%で最も多く、次に「父親」が19.2%、「近所の人」が16.9%、「ノリバン・保育園」が14.７%、「ベビーシッター・お手伝い」が5.2%の順であった（p.101 図４－１－３)。

これによりソウルの社会では、急に助けが必要になったときには、家族や身近な隣近所で助け合いが行われていることがわかる。

（２）幼稚園と保育施設に対する母親の要望

子どもが幼稚園や保育施設へ行く時刻は、朝「８時半頃」から「９時半頃」までが全体の84.3%、「９時頃」が37.7%の回答があった。家に帰る時刻は、「14時頃」が全体の15.3%で最も多く（p.49 図１－１－７～８)、幼稚園は「14時頃」28.3%、保育施設は「16時半頃」15.4%という回答が最も多かった(図表省略)。

母親の幼稚園や保育施設への要望の中身をみると、「まあそう思う」比率が多かったのは、「認知学習を増やしてほしい」41.2%、「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」43.3%、「集団生活のルールを教えてほしい」66.9%、「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」51.6%、「子育て相談ができる場所になってほしい」60.7%、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」44.1%であった。また「あまりそう思わない」比率が多かったのは、「保育の時間を長くしてほしい」50.1%、「家族が病気の時に、預かってほしい」43.8%、「自由な遊びを増やしてほしい」45.0%であった（p.179 基礎集計表)。

５．まとめ

以上の結果をもとにして、今回のソウルの幼児の生活アンケートで特筆すべき点は次のとおりである。

ソウル地域の幼児たちの１日は、午前７時半～８時に起きて22時以降に就寝することが示されたが、満４～５歳児たちに必要な睡眠時間が10～12時間であることを考慮すると、幼児期の健康と身体の発達のために十分な休息をとれるように、就寝時刻をもう少し早めることが望ましいと思われる。そして、ソウル地域に住む幼児とその家族たちは、生活のなかでインターネットとテレビ、ビデオなどの電子機器にかかわる活動に多くの時間を費やしていた。したがって、教師および両親を含めたまわりのおとなたちの指導および管理監督が求められる。

また、調査対象の72.6%が正規教育以外の課外活動（習い事）をしており、年齢が高くなるほどその割合も増加していた。幼児たちが最も多くしている課外活動は学習誌であったが、記述中心の詰め込み式の教育が幼児期に不適切であるという教育界および脳生理学分野の研究結果を考慮すると、韓国の幼児が幼児期にふさわしい教育と発達経験ができるように配慮することは急務である。

そして調査対象のうち、核家族の占める割合が全体の約70%にもなることがわかった。母親たちは、子育てに劣らず自分の生き方も大事であると思っている一方、子どものためなら母親は耐えなければならないと答えた。これは、夫婦中心の核家族である西欧社会とは違い、韓国社会では子ども中心の核家族形態が主流であり、女性としてのさまざまな役割のなかで母親としての役割が一番重要であるという社会の雰囲気が反映された結果であるといえる。

就業している母親は全体の約40%で、平均の帰宅時刻は18時から19時の間であった。父親の平均帰宅時刻は20時から22時頃で、家族の平均の夕食時刻が19時半であることを考慮すると、共働き夫婦とはいえ、帰宅後に子育ておよび家事に父親より母親のほうが多くの時間を費やしていることがわかる。また共働きについて夫がよく理解してくれるほうであり、夫の子育ての協力にもある程度母親は満足している一方で、さらに多くの協力を希望すると答えたことは、過去に比べて父親たちの子どもへの養育および家事労動に協力する割合が高くなったものの、いまだに子どもの養育および家事労動の主たる責任者が母親であり、これを夫と一緒に共有することを希望する結果と推測される。

これとともに、大部分の母親は満３歳までは母親が直接子育てをしたほうがよいと答えたが、これは子どもの養育の主たる責任者が母親であるという社会的規範に母親たちも同意していることを示しており、さらに保育施設に預ける際も、家庭で母親が養育するような質的に高い保育サービスを期待するものと推測される。最近、社会問題になっている低出生率と幼児期の子どもをもつ既婚女性の就業率が増加する社会状況を考慮すると、両親の期待する水準に応じた保育サービスの量的および質的な水準の向上が急がれており、これは個別機関ではなく国家レベルで政策的に推進していかなければならないものと思われる。

【参考文献】

李基淑　2001『創意的、全人的な人的資源を養成するための幼児教育革新』教育人的資源部。

金ヒョンジョン　2003「我が国における幼児の日常生活に関する研究」梨花女子大学校大学院博士学位 請求論文。

金ミシュク　1993「階級別家族と女性」 女性韓国社会研究会編 『女性と韓国社会: 韓国学時論』 社会文化研究所。

朴スジン 2001「幼児のいる親の早期・特技教育に関する実態分析研究」梨花女子大学校大学院修士学位請求論文。

朴ソンジュン　2005『青年失業の現況と原因の分析』韓国経済研究院。

尹テクリム 1996「生活文化の中における日常性の意味」『韓国女性学』。
ホンウンジャ 2001「母親の成就圧力と塾・学習誌の利用が幼児のストレスに及ぼす影響」梨花女子大学校大学院修士学位請求論文。

2

北京の結果と分析

張　燕（北京師範大学教育学院教授）

2005年3月、私たちは北京市の８か所の幼児園で幼児の生活に関する調査を行った。対象とした幼児園は北京の西城、海淀、朝陽、大興、延慶など５つの区と県に及び、各タイプの幼児園を含んでいる。内訳は、教育機関が運営する園３か所、地域組織が運営する園１か所、政府機関と研究所での附属幼児園２か所と民間運営の園が２か所である。調査対象は主に年少、年中、年長クラスの幼児の保護者である。アンケート用紙に記入した保護者は1,000人あまりで、総計992人からの有効回答を回収した。アンケートを配布した範囲と回収数からみて、基本的に北京市に居住する幼児（北京市に流入している農民の季節労働者の子女を含まない）の生活と家庭における育児の一般状況を反映していると考えてよい。アンケートの集計と分析から、以下の結果を得た。

１．調査対象となる幼児とその家庭の基本的状況

（１）一人っ子

調査対象となった992世帯中、一人っ子は68.8%を占めているが、２人きょうだいは15.4%、さらには３人以上のきょうだいがいる家庭も存在する（p.8 図Ａ−３）。中国の計画出産政策は決して厳格に決められたものではなく、中国の実情に即して制定されたものである。中国は農業大国であり、社会保障制度の整備が不十分で、農村の人たちは今も家族を老後のよりどころにしなければならない。このため、子どもを育てることが老いに備えることになるという考え方は変わっていない。計画出産政策は、人権に配慮した政策で、農村では第１子が女子であった家庭では第２子を産むことが許される。このほか、もし第１子が治癒の見込みのない病気にかかっていたり、あるいは障害を持っていたりする場合、第２子を産むことができる。また、一部の高収入の家庭では罰金を支払って戸籍を申請したり、国外で出産した家庭では制限を受けない状況下で第２子を産んだりすることもできる。このような状況は、計画出産政策をまだ徹底していない地域もあることを表している。

調査データからみると、幼児の性別は１対１で、男子と女子の割合は基本的に均衡がとれている（p.8 図Ａ−１）。

（２）家族構成

調査から、核家族は51.5%を占めていることがわかる（p.11 表Ｃ−１）が、およそ50%の家庭は依然として祖父母（父方あるいは母方の祖父母）と同居する三世代同居である。北京市のような大都市では、大方が夫婦共働きであり、かつ住宅事情も比較的よいほうで、

伝統的な家庭と核家族の割合は半々である。その他の地区では一般的にいって、核家族の割合はさらに低くなるであろう。三世代同居には上の世代に育児を助けてもらうという考えが働いているかもしれない。

（３）家庭の収入

家庭の収入というプライバシーにかかわるデリケートな項目では、無答不明が16.0%あった。

回答を得られたデータからみると、家庭間の月収のひらきは大きい。中流程度の月収「4,001元～10,000元」の家庭が44.5%を占め、中の下の「2,001元～4,000元」は20.2%、「2,000元以下」が3.5%である。「12,001元以上」の高収入を得ている家庭が11.4%を占めているのは注目に値する（p.184 基礎集計表）。これは、北京市の幼児園がサービスの対象としているなかに、一部高収入の層が確かに存在することを表している。経済的に高収入であれば、その家庭は必然的に良好な物質条件を備えている。それに相応して子どもの教育においても投資を惜しまない。ここで指摘すべきは、北京と上海は経済の発達した中国の大都市として特別であることだ。調査は決して中国全体の一般的な状況を代表するものではない。

（４）父母の年齢と学歴

調査に協力した子どもの父親の年齢は「31～35歳」と「36～40歳」という２つの年齢層に集中している。「41歳以上」の比率も9.2%である。母親については60.6%と半数以上が「31～35歳」であり、「26～30歳」は15.3%、他に19.6%が「36～40歳」であった（p.10 図Ｂ－２～３）。およそ70%が一人っ子という状況から分析すると、父母の出産年齢は比較的高い。出産の年齢が比較的高い保護者は、往々にして育児に一層細心の注意を払い、育児不安が比較的高いかもしれない。

保護者の学歴については母親の多くが「短期大学」あるいは「四年制大学」卒業で、それぞれ28.6%と37.3%を占めている。父親は次の３つの層に集中している。「短期大学」が20.7%、「四年制大学」が37.5%、「大学院」の学歴を有するのが17.1%である（p.11 表Ｂ－２～３）。

この結果は、保護者の文化的教養が高く、学歴が高くなっている傾向にあることを示しており、子どもの教育に対し一定のプラスの影響があるであろう。

２．幼児の生活状況

（１）幼児の生活リズムは基本的に規則正しいが、睡眠不足の傾向がみられる

調査結果をみると、幼児の日ごろの生活のリズムは、基本的に幼児の成長に適合していることがわかる。しかし、就寝時刻が遅く、睡眠時間が不足しているという状況が存在する。

北京の幼児は平日、朝の起床時刻は59.2%が「７時頃」に集中し、「６時半頃」と「７時半頃」の起床がそれぞれ16.1%と19.0%である（p.46 図１－１－１）。昼寝の時間は「１時間くらい」が15.7%、「１時間半くらい」と「２時間くらい」が27.0%と41.0%であった。昼寝をしないものはわずかに4.2%だった（北京と上海のみ調査、図表省略）。平日の就寝時刻は「21時頃」と「21時半頃」、「22時頃」がそれぞれ21.1%、38.3%と24.5%を占める（p.48 図１－１－５）。幼児の生活リズムは、基本的に規則正しいと考えられる。しかし、注意しなければならないのは、１割近い子どもの就寝時刻が22時半をすぎていることで、「22時頃」も24.5%に達している。これは、

多くの幼児の睡眠時間が10時間未満であることを示す。このような結果は、興趣班（習い事）への参加やテレビの視聴時間が長すぎることと関連があるのかもしれない。

幼児の朝食時刻は79.0％が「８時頃」で（p.47 図１－１－３）、夕食時刻は「17時半以前」が52.6％である。また、15.4％、13.4％、10.7％の幼児がそれぞれ「18時頃」「18時半頃」「19時頃」に夕食をとっている（p.48 図１－１－４）。北京の幼児園の託児時間は大半が10時間前後であり、３回の食事と１回のおやつを提供している。幼児は朝食と夕食を通常、幼児園でとる。このような状況は上海とは若干異なっている。

（２）興趣班（習い事）への参加が多い

調査で得られたデータからみて、北京の幼児の大多数が興趣班（習い事）に参加している。２つ以上の習い事に参加している幼児もいる。習い事の種類をみると、大部分が「絵画教室」「英会話などの語学の教室」「楽器・音楽」に集中している。それぞれ29.9％、22.9％、20.5％で、「計算・かきとり教室」に参加する幼児も14.9％に達している（p.56 図１－２－１）。具体的なデータからみると、幼児の年齢が上がるにつれて、学習系の習い事への参加も増えている。

習い事への参加の質問では、35.4％がいずれの項目も選んでいない（図表省略）。それは、一部の幼児園には習い事が設置されていないことと関係があるかもしれない。後述の「幼児園への要望」の調査項目の結果からみると、65.4％の母親が「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」と希望している（p.103 図４－２－１）。このことは母親にやはり強いニーズがあることを示すものである。

家庭の毎月の習い事の費用、絵本、玩具などへの支出にはばらつきがあり、40％近い家庭が毎月「51～200元」を支出し、25.0％が「201～400元」を支出している。「501～1,000元」やさらに高額を支出する家庭も12.9％に達している（p.174 基礎集計表）。このような状況は、前述した収入と子どもにかけている教育費用の支出との関係を裏づけているかもしれない。

（３）テレビなど現代のメディアが幼児の家庭生活のなかで多く活用されている

調査結果から、テレビやビデオCD、コンピュータなど現代的なメディアが幼児の生活にますます重要な役割を果たすようになっていることがわかる。「ほとんど毎日」テレビを見ている幼児は74.3％、「DVD（VCD）」「ラジカセ（CD）」や「パソコン」についてはそれぞれ、17.1％、13.8％、3.5％である。このほか、「学習用教具・知育玩具」の使用率が比較的高く、「ほとんど毎日」使用する子どもは13.6％である。これは保護者の教育観を反映しており、子どもの進学を考えてのことであろう。

喜ばしいことに、絵本は依然として子どもたちに最も人気があり、重要な役割を果たしている。北京の幼児のうち、「絵本」を「ほとんど毎日」を読んでいる子どもは50.6％を占め、「週に３～４日」を読んでいる子どもは17.3％である（p.170 基礎集計表）。しかしながら、現代メディアの出現によって、子どもの心の糧というべき絵本の果たす役割が、制約や制限を受けざるを得ないというのも事実であろう。

テレビを毎日平均「１～２時間」見ている割合は71.0％を占める。DVD（VCD）を毎日「30分～１時間」使用する幼児は55.3％である（p.171 基礎集計表）。幼児が幼児園から帰宅して自宅で過ごす時間は限られている。そのため、テレビを見る時間が長いと幼児のその他の活動に当然影響を与え、戸外での活動や友だちと交流する時間が制限される。

調査から判明した状況からみると、幼児はテレビなど現代のメディアを好み、つねにテ

レビあるいはDVD（VCD）を見ながら、手足や体を動かしたりその内容について話したり、また家の人と交流したりしている。このことは、現代メディアが幼児に対し大きな魅力を持っているということであろう。いかにその長所を発揮させ、そのマイナス面を避けるかは、幼児教育にかかわる仕事をしている者が真剣に取り組まなければならない問題である。

３．母親の子育て観、将来に対する期待

（１）子育てで重視すること

子育てで重視することをたずねたところ、「基本的生活習慣を身につけること」92.9%（「とても重視している」＋「まあ重視している」、以下同様）、「他者への思いやりを持つこと」92.9%、「屋外で遊ぶこと」90.7%、「友だちと一緒に遊ぶこと」93.0%、「親子でたくさんふれあうこと」90.6%、「自然とたくさんふれあうこと」89.2%、「身体を丈夫にすること」89.6%、「興味や関心を広げること」82.6%、「数や文字を学ぶこと」73.2%、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」71.９%、「外国語を学ぶこと」60.0%という結果になった（p.75 表２－３－１）。生活習慣や人への思いやりなど、よい基本的生活習慣の形成と道徳心の育成を最重要課題として位置づけているのは、もちろん正しいことである。友だちとの交流や親子の交流・活動も保護者から広く重視されている。戸外での活動、自然との接触や体づくりもかなり重視されている。それに対し、知識・技能の学習活動は順位からみて最後に置かれ、重視の度合いは低くなっている。このことは、幼児が日ごろ行っているさまざまな活動の位置づけについて、保護者の認識が基本的に正しいことを示している。

とはいえ、興味を伸ばす、数や文字を学ぶ、芸術的な才能を伸ばすことや外国語学習など、知識・技能の領域の活動は低く位置づけられているものの、比率はかなり高く、いずれも60%を超えている。これは、母親がやはりこれらの活動を重視していることを示している。このほか、幼児園に対する要望に関する項目の結果をみると、依然として大多数の保護者が「知的教育を増やしてほしい」と希望し、幼児園の活動が終わってから習い事を行うことを求めている。わが子に将来出世してほしいと願う保護者の気持ちの一端が、ここからうかがえる（p.103 図４－２－１）。

保護者は友だちとの交流や戸外での活動、体づくりなどをより重視してはいる。しかし、実際の生活では習い事に多くの時間を費やしており、さらに前述のテレビ視聴に関するデータと考え合わせてみると、テレビの視聴時間も長い。そのため、重視しているような幼児の心身にとって有意義なことの実行や実現は、難しいことがわかる。

（２）子どもの将来に対する期待は妥当である

今回の調査データからみると、北京の母親が子どもの将来に寄せる期待は妥当であると考えられる。どのような人になってほしいかについて10項目の比率を高い順にみると、「自分の家族を大切にする人」が71.8%で第１位、「仕事で能力を発揮する人」46.9%、「まわりから尊敬される人」45.5%、「自分の考えを貫き通す人」33.2%、「社会のために尽くす人」27.6%、「リーダーシップのある人」15.5%、「経済的に豊かな人」15.1%、「友人を大切にする人」14.2%、「のんびりと生きる人」14.0%、「他人に迷惑をかけない人」4.9%となっている（p.73 図２－２－１）。この結果は、上海の状況と少し異なっている。子どもの将来に対する期待は、伝統的な人間観の影響をかなり受けており、北京は人格や道

徳心、社会的責任や功績を重視する傾向が反映されているのではないだろうか。

しかし同時に、新しい傾向があらわれていることも示されている。思ったよりも多くの母親が「リーダーシップのある人」になってほしいと願っており、またゆったりとした、お金のある生活をしてほしいと願っている。これは、社会の趨勢と関係がありそうである。今日では、お金をたくさん稼いでゆったりした生活を送るということが、有用な人材であるか否か、あるいは成功か否かを計る基準になっているのである。

注意すべきは、「友人を大切にする人」の順位が比較的低いことである。これは母親が人としての重要なこの資質をいささか軽んじていることを示している。このほか、「他人に迷惑をかけない人」は人として最低限守るべきこと、あるいは最も基本的なことであり、現代人が必ず備えなければならない市民としての意識や資質であるが、残念なことに、選択した母親はわずか4.9%にすぎない。このような現象が、私たちの学校教育や社会教育と密接に関係しているのは間違いない。長期にわたってわが国の道徳教育は空疎な説教に流れ、市民教育は空白のままであった。私たちは道徳教育に励んできたが、人の基本的資質、すなわち最低限身につけるべきことを軽視してきたのかもしれない。人間としての基本的資質が備わっていなければ、道徳教育をしても、あまり意味がないのではないだろうか。近年、高学歴の人たちが罪を犯したり自殺したりする例がしばしば報道されるが、このような状況に私たちは注目すべきである。市民教育にあるべき地位を与える時期に来ているのである。

（３）学歴に対する高すぎる期待と有名大学への入学希望

子どもの学歴に対する期待では、北京の母親の中で短期大学を望むのは0.0%である。母親の期待は四年制大学や大学院に集中し、それぞれ24.9%と71.5%で（p.77 図２－４－１）、子どもに大学院の学歴を望む母親が圧倒的多数を占めている。子どもの学歴に対する期待が高すぎて、すでに現実離れしている。社会における人材の学歴は正規分布を示すはずで、学歴が高い者の割合も小さくなる。いかなる社会経済条件のもとでも、ピラミッドの頂上にいる人間はごく少数しかいない。子どもの学歴について現実離れした期待を抱くことで、母親は必然的に育児不安に陥る。それによって、知らず知らずのうちに子どもに対するプレッシャー、とくに学習面でのプレッシャーを増すことになる。

さらに、母親の子育て観に関する質問では、子どもの将来の学歴について聞く項目がある。北京の母親が「世間で名の通った大学に通ってほしい」を選択した比率は、なんと74.1%（p.71 図２－１－１⑦）にのぼっている。多くの母親が子どもの学歴に対して高い期待をもち、有名大学に通ってほしいと考えている現状は、いまの中国の社会で成功したことを計る基準として、学歴や社会的地位がよく用いられる傾向と無関係ではない。同時に、育児において母親が虚栄や盲目的な競争へ走る傾向があることが見え隠れする。これは、幼児の健全で調和のとれた成長にとって有害無益である。

（４）母親は育児に不安を抱いている

つづいて、子育てについての意識をたずねた結果である。母親の心配のトップは、「いつも子どもの安全と健康を心配していること」（北京と上海のみ調査、p.176 基礎集計表）で、「よくある」と「ときどきある」の比率（以下同様）はそれぞれ24.8%と43.3%であった。また、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」は12.0%と41.8%、「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」は13.0%と60.5%、「自分の子どもが他人の子どもより劣っていると思うこと」（北京と上海のみ調査）は1.5%と16.6%

であった。このような状況は、子育てにあたって、母親がよく迷い、孤立感を感じていることを表している。とくに子どもの安全や健康上について不安を感じている。これは、大多数が一人っ子、すなわち一家族に１人しか子どもがいないためであるが、同時に現在、社会で保護者向けの研修や子育て相談が欠如していたり、保護者がどのように手助けを求めたらいいかわからなかったりするためではないだろうか。また、母親が現在の社会の治安に不満を抱き、安全ではないと感じていることを間接的にあらわしているのかもしれない。

さらに、子育てと母親自身の成長との関係についてであるが、北京の母親の大多数は比較的正しい認識を持っている。67.3%の母親が「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」に「よくある」と回答しており、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」も64.8%である。また、「子育てによって自分も成長していると感じること」は、「よくある」41.9%、「ときどきある」37.7%となっている（p.175 基礎集計表）。育児と自分自身の成長を同じ歩みとして考える母親の姿勢は、喜ばしいことである。育児においては、前もってトレーニングをして準備を整えてから子どもを産み育てるわけではない。現代社会が生涯学習を強調しているように、子育てをしながら、絶えず学んでいくことが必要であり、また子どもから学ぶことも多いかと思う。それらを繰り返しているうちに、母親は自然に自分自身の成長をも実現していくのである。

また、81.6%の母親は、「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」が「よくある」と回答している。「自分の子どもは結構うまく育っていると思うこと」は、「よくある」50.5%、「ときどきある」36.0%である。母親の子どもに対する肉親の情、子どもを愛する気持ちは当然のものかもしれないが、この結果は母親が子どもの成長に比較的満足していることの表れでもある。

ただし、一部の母親は子育てに対して否定的または悲観的である。「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」には、36.3%が「ある」（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）と回答し、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思うこと」も20.2%である。「子育てのために、自分を犠牲にしているのにもかかわらず、子どもがなかなか自分の期待にこたえてくれないこと」（北京と上海のみ調査、p.176 基礎集計表）は15.5%、「子どもに八つ当たりしたくなること」は11.7%が「ある」と回答している。

次に、現在の生活や子どもの成長に対する満足度についてみてみよう。現在の生活に「とても満足している」は23.7%、「まあ満足している」は65.6%であった（p.83 図２－６－１）。子どもの成長への満足度では、「とても満足している」のが20.1%、「まあ満足している」のが72.1%で、この２項目にいずれも満足していない（「あまり満足していない」＋「ぜんぜん満足していない」）母親はわずかに６～９％であった（p.84 図２－６－２）。このことは、改革開放政策が始まって20数年来、確実に中国社会に生活の変化が起きていて、人々の経済状況や生活レベルが大きく改善され、向上したことを物語っている。それが、子どもの健全な成長に有利な条件を作り出し、良好な物質的基盤を提供したのである。これは北京の保護者のだれもが認め、身をもって感じていることでもある。

４．父親の家事や育児への参加状況

ここでまず母親の仕事の状況をみてみよう。働いている母親（「常勤（フルタイム）」＋「パートタイム」）が77.1%で、「専業主婦」は5.0%にすぎない（p.10 表Ｂ－１）。「週５日以上」働く母親は90.2%である。妻の仕事を理解している（「とても理解してくれる」＋「まあ理解してくれる」）夫は83.9%である（p.175 基礎集計表）。こうした結果は、前述した「女性が天の半分を支えている」こと、すなわち女性は男性と同等の社会的、政治的、経済的地位を有する状況と一致する。これはまた、都市における家庭生活の実態とライフスタイルを表してもいる。中国の都市においては、一般的に、夫婦２人とも働いており、家庭生活や育児には夫婦双方の共同の努力を必要とする。

（１）父親の家事への参加状況

家事において、父親が「買い物をする」（「ほとんど毎日する」＋「週に３～５回する」＋「週１～２回する」、以下同様）比率は比較的高く、64.7%である。「掃除をする」のは51.3%、「食事の後片付けをする」は53.4%、「食事のしたくをする」は少し低くて46.1%だが、「ごみを出す」は66.6%に達している（p.177 基礎集計表）。これは、双方が完全に対等ではないにしても、父親が母親と共同で家事を担っていることを示している。

毎日の母親の帰宅時刻については（p.175 基礎集計表）、85.6%が夕方の「17時台」「18時台」「19時台」の３つの時間帯に集中し、父親の帰宅時刻については（p.87 図３－１－１）、61.2%が夕方から夜にかけて、「18時台」「19時台」「20時台」に集中している。父親と母親を比べると、母親のほうが帰宅時刻が若干早い。これも父親の家事への参加が母親より少ない原因の１つであろう。

父親の家事への参加状況に満足している（「とても満足している」＋「まあ満足している」、p.94 図３－３－１）母親は57.9%に達しているが、83.8%がもっと家事に参加してほしい（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様、p.94 図３－３－２）と回答している。一方、父親に家事にもっと参加してほしいと思わない（「あまりそう思わない」＋「ぜんぜんそう思わない」）母親も15.6%いる。これは１つには伝統的な「男は外、女は内」という家庭観と関係があるのかもしれない。もう１つには、父親のほうが社会的責任と家庭責任がより重いことと、ある程度の関係があるのかもしれない。

（２）父親の育児への参加状況

次に、育児への参加状況である（p.91 図３－２－２）。大多数の父親は、「週に３～５回」（15.3%）あるいは「週に１～２回」（61.4%）子どもと一緒に外で遊んでいる。「子どもと一緒に室内で遊ぶ」は「週に３～５回する」は30.1%、「週に１～２回する」は34.3%であった。父親が子どもとの関係を重視し、一緒に遊ぶなかである程度の教育ができると考えているのであろう。このほか、子どもの行動や様子をつねに見守って、「子どもを叱ったり、ほめたりする」父親は60.3%（「ほとんど毎日する」＋「週に３～５回する」）、「週に１～２回する」の比率は32.3%である。父親が子どもへの教育をかなり重視していることがわかる。

子どもの世話に関しては、父親も積極的にしている。とくに子どもが病気の時には、84.4%の父親が面倒を見ると回答している（p.178 基礎集計表）。「子どもを寝かしつける」父親は20.8%（「ほとんど毎日する」＋「週に３～５回する」、）で、「週に１～２回する」も30.2%ある。「子どもをお風呂に入れる」のは、「ほとんど毎日する」と「週に３～５回する」の合計が9.3%、「週１～２回する」は31.6%である。ちなみに、母親の子育

て観に関する質問で、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」という意見を選択した母親は67.9%を占めていた（p.70 図２－１－１①）。この質問と結びつけて考えると、母親と比べれば父親の育児への参加は少ないだろう。とはいえ、父親として、小さい子どもに対してある程度の生活面の世話をするのは、何はともあれ、なかなかできないことではないだろうか。

父親の育児参加の現状への満足度は家事参加より高く、57.7%が「満足している」（「とても満足している」＋「まあ満足している」）と回答している（p.94 図３－３－３）。また、子育てはなんといっても父母双方の義務と責任であり、母親も仕事を持ち、社会的責任や役割を担わなければならない。このことから、父親にさらに育児に参加してほしいと考える母親は、ほぼ100%に近い（p.94 図３－３－４）。

５．子育て支援に関して

（１）子育て支援サービスの施設と形態

保護者が子どもを幼児園に送っていく時間は、朝「７時半以前」から「８時頃」に93.8%が集中している（p.49 図１－１－７）。子どもを迎えに行く時間は、「17時頃」33.0%、「17時半頃」41.7%、「18時頃」17.0%の３つの時間帯に集中する（p.50 図１－１－８）。このデータは、子どもが幼児園での生活が毎日およそ９時間であることを示している。同時に、北京の幼児園の幼児教育サービスの時間が９時間であることを意味し、前述した幼児園の一般状況を裏づけている。

母親の幼児園に対する要望は、幼児に対する教育サービスの増加や改善のほか、母親に必要な子育て支援サービスを提供することに集中している（p.103 図４－２－１）。

幼児に対するサービスでは、「保育の時間を長くしてほしい」と望む母親が26.4%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様）、「家族が病気の時に、預かってほしい」42.2%、「子どもが病気の時に、預かってほしい」22.4%となっており、この３つの項目については北京と上海の結果が基本的に一致した。これらのなかでは、「家族が病気の時に、預かってほしい」という比率が最も高く、母親のニーズが最も強いということであろう。このことは、幼児園の現在の保育サービスが必ずしも母親のニーズを完全には満たしておらず、改善が行われるべきだということを示している。保育時間の延長要求に関しては、北京の母親の65.7%が消極的である（p.179 基礎集計表）。このデータは、多くの母親がそれを必要としていないことを示しているのかもしれない。また、人々が正規の託児施設（単一の全日制託児形態と固定化されたサービスへの考え方）に長年慣れきっていて、現在の登園・降園時間を当たり前だと考え、改善の要求を出さなくなっている可能性もある。

また、母親が仕事以外で家を空けるときに子どもの面倒を見る人（機関・サービス）の結果（p.101 図４－１－３）をみると、北京は22.8%が「父親」、76.0%が「祖父母や親戚」と回答している。託児施設に一時的に預けること（「幼稚園・託児所の一時託児」＋「民間の託児サービス（一時預かり）」）を選択した母親はわずか11.4%にすぎず、「自治体の育児支援サービス」を選んだのは0.0%で、１人も選択しなかった。これは一時預かりに対して、母親のニーズがあるにもかかわらず、このようなサービスを提供している幼児園は少なく、自治体の育児支援サービスは完全に空白状態であることを示している。（近年、北京市の一部の幼児園は３歳未満の幼児と保護者向けに週末の教育サービスを展開してはいるが）社会の子育て支援サービスの形態はごく限られたものであり、このため保護者には

選択の余地がないのである。

（２）母親の育児相談や保護者交流に対するニーズが高い

北京では、93.1%の母親が「子育て相談ができる場所になってほしい」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様）を希望しており、そのうち半数が「とてもそう思う」と回答している。これは母親のニーズが高く、普段、子育て相談の機会がめったにないことを示している。現在、社会や地域では、このようなサービスはほとんど行われていない。したがって、保護者は幼児教育施設に支援を求めるほかはない。

そればかりでなく、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」というニーズも非常に強く、92.7%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）に達しており、「とてもそう思う」は56.9%である（p.180 基礎集計表）。これも、幼児園がこのような活動をほとんどしてこなかったことを表している。子育ては実践性がとても高いものである。幼児をきちんと教育するには、家庭と園との連携が重要であるばかりでなく、母親の間の交流も欠くことができない。共通の関心事である育児について経験を共有し、教えあうことができるからである。母親は同じ立場であり、互いに経験や体験をもとに話ができる。それは、それぞれの子育てに役立つ。また、母親自身が成長するための大事な手段であり、生涯学習の１つでもある。しかし現状では、母親はほとんどこのような機会に恵まれず、助けを求めようにもたたくべきドアがないのである。

このような幼児園に対する子育て支援のニーズは、実際上、幼児教育にこの面で潜在的な巨大市場が存在することを物語る。託児施設は母親のニーズを把握し、絶えずサービスを改善すべきである。とはいえ、託児所や幼児園の主要な役割は正規の受け入れであるので、あらゆる子育てサービスを請け負うことができるわけではない。一方、地域は住民の生活の場であり居住環境として、母親の支援に大いに力を発揮できる可能性がある。政府や関係部門は、真摯にこの問題を検討し、実行可能な措置をとり、適切な政策を出して、速やかにこの空白を埋め、相応のサービスを提供して保護者や社会のニーズに応えるべきである。

６．北京市の都市部に住む幼児の生活における問題と解決策

今回の調査結果に対しては、満足に感じるところが多い反面で、心配になるところも多かった。北京の幼児の生活状態、およびその成長は基本的に良好であり、保護者は教育をとても重視し、子どものための投資を惜しまず、良好な物質的条件を整えている。しかし、一方では、幼児の成長やその環境には落とし穴が存在し、注意を払う必要がある。

（１）幼児が感じるプレッシャー

調査結果からみて、北京の都市にいる幼児は、大きなプレッシャーを受けている。こうしたプレッシャーの多くは、保護者の不適切な育児方法や期待からきている。たとえば、幼児は、多くの時間を習い事に費やしている。加えて、現代のメディア、とくにテレビが人々の日常生活に大きな影響を与えている。この結果、幼児は戸外で活動したり遊んだり、友だちと交流したりする機会を失って、幼児らしさがなくなり、ほとんど学習マシーンに変わっているものもいる。

今回の調査では、一部の幼児が睡眠不足であると推測される（p.51 図１－１－９）。にもかかわらず、「幼児園への要望」に対する回答（p.103 図４－２－１）では、「知的教育を増やしてほしい」という回答が９割（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）、「保育終

了後、おけいこ事をやってほしい」という回答が6割を超えている。関連する資料と合わせて分析すると、母親が習い事などで学習量の増加を希望するのは、往々にしてよい小学校、中学校への入学を希望することと密接に関係している。このことは、受験を目指した教育が、就学前からすでに始まっていることを物語る。

都市に住む幼児の家庭の経済状況は、以前に比べて大幅によくなっている。収入の向上によって、保護者は子どもの教育への投資を増やしたい、子どものためにできるだけよい教育環境を整えたいと願い、しかもそれらのことが可能になっているといえよう。しかし、同時に、そのために生まれるマイナスの影響にも目を向けなければならない。物質的な豊かさは、精神的な豊かさをもたらしてくれるとは限らない。とくに保護者の教育投資が功利的であり、盲目的な競争心を持ち、見返りを求めるものであれば、思いがけない傷を子どもに与えることがある。たとえば、保護者が子どもに対し、一方的に将来の目的を定め、あまりにも早い段階から知識や技能を教え込んだり、学歴に対する非現実的な高すぎる期待を抱いたり、有名大学を崇拝したりすると、幼児に精神的に大きなプレッシャーを負わせ、本来楽しいはずの幼児期の生活から彩りを奪ってしまう。

アンケート中の幼児の性格に関する質問では、保護者の記入状況からみて、多くの項目に幼児の本来の性質が反映されている。たとえば、90%以上（「とてもそう」＋「まあそう」、以下同様）の子どもが外で遊ぶことや、自分のやりたいことを積極的にやること、友だちと一緒に遊ぶことを好んでいる。しかし、こうした子どもの成長についての回答にも、注意を要する傾向があることに気づかされる。たとえば、3割近くの保護者が自分の子どもは「1人で遊ぶのが好き」に「そう」（「とてもそう」＋「まあそう」）と答えているし、7割は「家の中で遊ぶのが好き」を肯定している。「誰とでもすぐ仲よくなれる」については、「そうでない」（「あまりそうではない」＋「ぜんぜんそうではない」）という回答が15.8%おり、「がまん強い」も41.9%の保護者が否定している（p.180 基礎集計表）。このような状況に注意を払い、背後に隠れている原因を探らなければならない。

（2）意識と行動の不一致

子育てについての意識をみると、都市の母親たちは多くの不安を持っていることがわかる。子どもがうまく育っていくかどうか心配し、子どもの安全や健康を心配し、子どもが将来高い学歴を持ち、有名大学に入り、仕事で成功し裕福な人になることを期待している。このような穏やかではない育児心理は、子育てに緊張感をもたらし、窮屈な雰囲気を作っている。知らず知らずのうちに子どもの成長にプレッシャーを与え、健やかな成長にマイナス影響を与えてしまう。

母親の育児における過剰な不安は、1つには、家庭教育そのものの特徴、たとえば孤立しがちであることや、閉鎖的であることと関係がある。同時に、母親のあせりをあおぐような現在の市場主義にも影響を受けている。母親は子育て支援を望んでいるが、どこに助けを求めたらよいのかわからないのである。

さらに、母親の回答には、考え方と行動の不一致がみられる。幼児のどの活動をより重視するかという観点からみれば、大多数の母親は生活習慣や人への思いやりなど道徳心を身につけることをトップに位置づけ、戸外活動や友だちとの交流も比較的重視しており、知識・技能の学習を重視する姿勢は比較的弱い。ここからは、母親が何をより重視すべきかについて、正しい認識を持っていることがわかる。しかし、具体的な場面になると、母親がとる教育方法や行動は、目指す方向と異なる。たとえば、子どもを習い事に参加させたり、知的教育の強化を望んだりして、その結果、子どもは他の活動をする時間的な余裕がなくなってしまう。たとえ彼らが重視すべ

き活動をさせたいと考えても、時間もエネルギーもなくなってしまうのである。

また、母親の子育て観をみると、多くの母親は子どもを尊重し、見守る姿勢をとっている。たとえば、わがままを言ったら、わかるまでやさしく言い聞かせるのがよいと考え、子どもの自主性を重んじる必要があると考えており、文字や数は子どもが関心を持つようになってから教えるということに賛同している。しかし、実際の具体的なシーンになると、子どもの気持ちを推し量っていないようにみえる行動が多い。ある研究によれば、興趣班（習い事）をさせるのは、多くが保護者の興味の反映であり、子どもの興味ではないことを示している。子どもにとっては、思いきり遊ぶことが最大の興味であり、知識や技能の学習を強制されることは、子どもの本来の性分に背くものである。

ところで、このように育児における考え方と行動が一致しないという現象を、どう分析し、考えたらよいのだろうか。保護者は社会的に承認されている考え方から影響を受けていて、それほど的外れな意識を持っていない。しかしながら、実際の行動においては、伝統や習慣が依然として強く支配している。それに加えて、幼児教育における市場主義とメディアのあおりの影響を受けて、無意識に知識・技能の学習を押しつける方向へと保護者を走らせてしまうのである。今回の調査は、これまでに行われている先行研究を、まさに裏づける結果となった。また、近年、雑誌や新聞紙上に発表された報道も、こうした傾向を証拠づけている。たとえば、2005年６月20日の『北京青年報』には、ある保護者からの投稿が載っている。子どもが４歳の時、遊ばせるのをやめ、よい学校に入るためにいろいろな習い事に参加させたが、結局失敗してしまったという話である。

（３）現代メディアの重要性とマイナス影響

調査結果から、テレビやDVD（VCD）などの現代のメディアは、すでに幼児の生活の一部分になっていることがわかる。しかも、それが幼児の生活に占める割合はますます大きくなりつつあると考える。このような状況で、伝統的な絵本の読み聞かせが減少している。幼児は、家庭で多くの時間をテレビや現代のメディアに費やしており、内容についてはともかく、ただ時間の面だけからみても、子どもの心身の発達に役立つ活動、たとえば戸外活動や友だちとの交流などの時間がなくなっているのである。

また、前述したように調査結果からは、一部の幼児が睡眠不足であることがわかる。このような状況には、十分な注意が払われるべきである。その原因として、保護者が基本的生活習慣の形成を軽視していることや、テレビの視聴時間が長すぎること、習い事への参加の影響などが考えられる。

この問題に対し、テレビなど現代メディアの長所を生かし、そのマイナス面を最大限抑えるために、研究を深める必要がある。私たちは、メディアのマイナス面を抑える方法を究明し、積極的な対策をとる必要に迫られている。まず、よい生活リズムが形成されるように注意を払い、テレビ視聴時間をコントロールし、同時によい生活習慣を身につけさせねばならない。さらに、子どもを連れて外に行き、自然に触れ、心身を楽しませ、友だちと交流する機会を一層多くするよう保護者に呼びかける必要がある。

また、現代メディアが氾濫している今日ではあるが、幼児向けの絵本などの伝統的なメディアについて伝承すべき大事な文化、精神の糧であるという価値観を改めて確認し、親子での読書運動を大いに提唱する必要がある。そうすることによって、１つには親子のコミュニケーションが深まるが、同時に、子どもの一生にも読書が積極的な役割を果たす

ようになるだろう。

（４）社会と教育のミスリードが生む悪循環

調査結果を分析してみると、幼児の生活と成長過程に存在する一部の問題や保護者の不適切な教育方法は、相当程度、誤った価値観によってもたらされていることがわかる。マスメディアの煽動やミスリードは、保護者の幼児教育に対する認識の誤りをさらに悪化させている。

調査で得られた状況からみると、北京の保護者の学歴レベルは、以前に比べ高くなっている。しかし、幼児教育は１つの専門分野であり、分野が違えば素人同然ともいえる。保護者は、多くの人に認められている教育観、たとえば「子どもを尊重しよう」などの流行の言葉を口にすることはできるが、幼児教育についての専門知識を勉強したわけではない。保護者の行動を本当に支配しているのは、自分自身の教育観、たとえば、「教育とは知識や技能を伝授することである」とか、「学んで優れればえらくなり出世する」といったものである。間違った伝統的な教育観というものは、もし意識的に改めなければ、つねに力を振るい、人々の行動を支配していくものである。

近年、中国の幼児教育は次第に市場化の方向に向かい、ひろく関心が注がれている。多くの専門外の人たちがこの市場に参入し、おいしいパイの分け前にあずかっている。保護者のニーズに付け込むように、市場とマスメディアがみだりにあおりたてている。一時、「神童（天才）を造る」「24時間知力開発」「潜在能力の開発」「幼児早期英語学習」「天才教育は０歳から」などといった情報や宣伝が、絶えず人々の目に飛び込んできた。都市部の家庭ではほとんどが一人っ子であるため、保護者は「スタートラインで負けるな」とか「個性を伸ばす」などというスローガンに惑わされて、思わず行動してしまうのである。さらに、一部の幼児園は専門機関としての指導的役割を果たすのではなく、市場の動きに迎合している。こうした社会や教育のミスリードが、保護者の間違った考え方と不適切な教育方法を助長し、悪循環に陥る結果を生んでいるのである。

幼児の成長する権利は、社会によって保障されなければならない。このような状況に対して、メディアは社会的責任感をさらに強め、ニュースの効果を上げるための煽動を避け、偽りの宣伝を極力減らす必要がある。それらに代えて、事実に基づき、真実を求める報道を行う必要があろう。社会が発展する方向や教育原則に合っているかどうかを、ニュースの内容を取捨選択したり、報道のポイントを決めたりする際の原則としなければならない。「無知は過ちではない」である。このため、いかに科学的な育児知識をひろく宣伝し、普及させるかが非常に重要になってくる。

これについて、専門機関としての正規の幼児教育施設は、責任を他に転嫁せず、幼年期の価値や幼児教育の役割を保護者に正しく認識させる必要がある。それと同時に、家庭教育が幼児の成長にかけがえのない影響を与え、保護者自身に重大な責任と役割があることを理解するように導く必要があるだろう。子どもに一層の自由を与えて制限を減らし、平常心を多くして功利的な考えを減らすことを、いま、とくに強調しなければならない。おとなや保護者の体面からではなく、子どもにとっていいこととは何かという観点から出発してはじめて、適切な教育方法を見いだせるのであり、成長に有益な環境を整え、子どもの健全な成長がはかれるのである。

（５）幼児園が担うべき社会サービス機能

近年、中国は経済システムの転換をはかっている。幼児教育は当然このような背景に適合するように、考え方やシステムの変革を実現しなければならない。幼児園は、社会と市場の多様化のニーズに対応し、教育サービス

施設としての意識を強める必要がある。そして、園の運営を開放し、すすんで社会と保護者のニーズを理解し、対応して、従来のサービスの形態と方法を調整し改善をすすめ、社会のニーズを満足させなければならない。調査結果をみると、全体的に北京の幼児園は、依然として単一の全日制の託児システムをとっており、一時的な託児サービスやその他のサービスを提供することはごく少ないことがわかる。調査のなかで明らかになった保育時間延長や従来とは異なるサービスへの要望は、事実上この面でのサービスが欠けていることを示している。保護者から出された育児相談、保護者間の交流への切実な要望も、幼児園がサービス精神にかなり欠けていることを物語っている。運営が閉鎖的であり、変わらないままで千変万化に対処しているというのが、現在の幼児園の現状かもしれない。

幼児園での教育と家庭教育が歩調を合わせ、両者が緊密に協力してはじめて質の高い教育が可能になり、本当の意味で幼児の健全な成長を促進できるのである。家庭と幼児園が協力し合う教育を実現し、幼児園が幼児教育の専門機関として保護者をリードし、主導的な役割を積極的に果たさなければならない。さらには、教育機関として文化的な影響力を周囲に及ぼし、社会に正しい教育観、とくに教育の質に対する正しい考え方を宣伝し普及させる必要がある。たとえば、「人の能力」や「教育の成功」について議論を巻き起こして社会の流れをリードし、市場に影響を及ぼすこともできる。さしあたって、幼児教育のなかに、市民教育に関する内容を増やすべきである。教育を本来の目的に回帰させ、次世代の資質の強化をはかることは、非常に重要なことである。北京の幼児園は、この面でかなり遅れている。

幼児教育の世界的な動向からみると、幼児園はいま、地域の幼児教育の中心になりつつある。その役割として、地域の正規の託児サービスを担うことのほかに、多様化した幼児保育サービスを提供すること、保護者の子育てにおける疑問や迷いに対して相談サービスや研修を行うこと、社会に向けて正しい教育観や保育方法を発信することなどがあげられる。幼児教育は、地域での生活を有機的に構成する要素である。北京の幼児園が地域との連携をどう強めたらよいか、さらに地域にどう溶け込み、互いに頼りあい刺激しあえるようになるにはどうしたらよいか、まだまだ長い道のりが残っている。

（６）時代の要請としての地域教育と育児支援サービス

今回の調査の結果、北京では地域の育児支援サービスがほとんど空白であることがわかった。保護者に必要が生じた場合、幼児教育施設に支援を求めるほかは、自分で解決方法を見つけるほかはない。たとえば、母親に用事ができた場合、大半は祖父母が子どもの世話をするか、父親が見るか、お手伝いさんを頼む。

一般的にいって幼児園など正規の幼児教育施設では、幼児に対する教育サービスを主要な役割としている。したがって、たとえ将来、地域にうまく溶け込んで、社会サービスの機能を担い、それ以外のさまざまなサービスを提供できるようになったとしても、すべてを引き受けることは不可能であろう。市場経済の下では、社会の幼児教育に対するニーズは多岐にわたる。ましてや幼児教育の重要な特徴は、その社会性、大衆性および、家庭や地域との緊密な連携にある。地域の中では、民間、個人、企業、地方政府さらにはニーズを持つ保護者などが担い手となって、ニーズと条件に基づいたさまざまなかたちの非正規教育を発展させ、柔軟で多様な育児支援サービスを提供することが可能になるだろう。一方では、さまざまな階層の保護者のニーズを満足させ、同時に１つの就業機会として、仕事をもたない人を動員して公共サービス事業に参加させることもできる。言い換えれば、地域を中核として、需要と供給の間を橋渡しす

ることは、非常に便宜性があり、実行しやすい方法なのである。

教育部は、1997年にすでに「わが国の幼児教育が発展する方向は、地域を拠り所に、正規と非正規を結合させた組織形態を作ることである」という方針を出している。近年、この方針が繰り返し確認されている。しかし、それには地方政府のさらなる注力や、関連する部門の協力が必要であり、多様化がすすむ幼児教育と地域の育児支援サービスの面で具体的な政策や措置がとられるのを待たなければならない。世界ではこの分野ですでに一定の成熟した実践が行われ、成功例が蓄積されている。私たちはこうした国外の事例を参考にすると同時に、先行する地点を作り、まず最適な方法と形態を探ったうえでそれを広めてもよいのである。

地域の中には、幼児教育に資する多くの資源が内包され、潜在的な教育のニーズや市場も存在する。地域の育児支援サービスを発展させることは時代の要請であり、大いに行われるべきである。そのなかで、肝要なのは考え方の転換なのである。

【参考文献】
「コンピュータ割り振りからの逃避８年間のマラソン―ある保護者からの手紙」『北京青年報』(2005年6月20日付)。
張燕　2004「地域教育は幼児教育事業発展の必然である」『幼児教育』浙江省教育報刊社。

3

上海の結果と分析

朱　家雄（華東師範大学学前・特殊教育学院教授）

１．幼児の生活実態

（１） 生活リズム

調査結果からみると、上海の就学前の幼児はおおむね、朝「７時頃」41.2%から「７時半頃」34.2%の間に起床する（両者合わせて75.4%、p.46 図１－１－１）。夜の就寝時刻は「21時頃」から「22時頃」に集中している。そのうち「21時頃」が29.8%、「21時半頃」が37.1%、「22時頃」が16.0%、３者合わせて82.9%である（p.48 図１－１－５）。子どもたちの夜の睡眠時間はおおむね９時間から10時間半の間で、それに加えて昼寝が１時間から２時間あり、１日の睡眠時間は10時間から12時間半である。

上海の就学前の幼児の朝食時刻は「７時半頃」が47.1%、「８時頃」が32.6%を占めており（p.47 図１－１－３）、保護者が子どもを幼児園に送るために家を出る時刻は「８時頃」が46.8%、「８時半頃」が35.2%を占めている（p.49 図１－１－７）。前述の起床時刻と合わせて考えると、子どもが着替えや洗面などを行う時間はおおむね30分で、朝食や登園準備の時間もおおむね30分だと推計できる。

（２） 習い事（興趣班）

上海の就学前教育機関における習い事は主に２種類に分けられる。１つは幼児園が通常の活動時間終了後に開設している習い事（課外興趣班）で、幼児園の教師や幼児園が外から招いた教師が教える。これにより、仕事で忙しい保護者たちが遅めの時間帯に子どもを迎えに行くことができるようになり、また、子どもに何らかの「技能」を学ばせたいという保護者のニーズを満たすことにもなる。また、幼児園が少なからぬ副収入を得ることができるという面もある。もう１つは、週末に半日や１日、あるいは平日の夜に社会教育機関がやっている習い事（興趣班）である。一般的に、そのカリキュラムは一定の連続性があり、レベルが高く、１回の学習時間も比較的長い。保護者が習い事に子どもを通わせるのは、子どもを全面的に成長させたい、小さい時に基礎をつけさせたい、他の子どもの一歩先を行かせたい、特技を身につけさせたいなどの動機、あるいは「よその子どもが通っているから自分の子どもを通わせないわけにはいかない」という横並び意識からであり、また、「友だちがみんな習い事に通っているから」と子ども自身が行くことを望むケースもある。

今回の調査結果をみると、上海の就学前の幼児の習い事への参加の全体に占める割合は78.4%で、ほぼ80%近い。習い事への参加はすでに当たり前の現象になっており、子どもが興味を持つかどうかの問題ではなくなって

いる。習い事に参加する子どもの割合は、3歳児56.1％、4歳児77.4％、5歳児89.0％、6歳児91.0％と、年齢が上がるにしたがい増える一方である（p.54 表１－２－１）。

習い事の内容をみると、上海の子どもたちの参加が多いのは、順番に、「絵画教室」49.6％、「英会話などの語学の教室」37.0％、「楽器・音楽」30.2％である（p.56 図１－２－１）。その他、2割弱から1割の子どもが計算やスイミングスクール、バレエ・リトミック、囲碁教室などの習い事に参加している。絵画教室の参加人数が最多で、約2人に1人の割合になる。このように高い割合を示したのは、単純に保護者の絵画に対する注目度が高いからだとはいえないかもしれない。これはやはり上海地区の就学前の絵画教育システムが整っていること、普及が進み、参加しやすいこと、また費用も相対的に安いことと関係があるが、さらに重要なのは絵を描くこと自体が子どもの天性に近いものなので、子どもたちが興味を抱きやすく、学習の継続がしやすいことである。

次に多いのは「英会話などの語学の教室」である。ここから上海の保護者の子どもの英語学習への注目度の高さがうかがえる。その原因を突き詰めると、1つには上海は対外交流の盛んな国際的大都市であり、外国語、とくに英語に対する要求が高く、外国語のレベルの高さが就職と直接的な関係があるという現実がある。もう1つは、ここ数年来、メディアやビジネス業界の「子どもに外国語を学ばせるのは早ければ早いほどいい」という宣伝やあおりのせいで、保護者が心を揺さぶられ、スタート時点で子どもを優位に立たせたいという焦りが存在することである。上海で最先端を行く英会話教室は外国人教師が主として教え、中国人教師が補助する教学スタイルである。というのは、外国人教師の看板を掛けると、受講料は特別に高くなり、利益も増すからである。一方、保護者は消費者として、外国人教師の教育の質に信頼をおく傾向にあって、授業料を惜しまない。また、英会話以外の語学教室は実際にとても少ないので、上海においては外国語の概念はほとんど英語とイコールなことがわかる。

注目すべきことに、「計算・かきとり教室」の参加比率は19.7％で、第4位である。しかし、第3位の「楽器・音楽」と10.5ポイントの差が開いている。予想されるほど、上海の多くの保護者が読み書きや算数を重視してはいないことになる。

年齢別にみると、「絵画教室」の参加比率は、6歳児以外の年齢において最多である（図表省略）。しかも、他の習い事の比率を大幅に上回る。「英会話などの語学の教室」の参加比率は3歳児で26.1％、5歳児まで参加率が上がって43.5％になる。6歳児で48.9％と最高になる（図表省略）。

特筆すべきは3歳児における習い事の参加の状況である。3歳児の56.1％が習い事に参加している。37.2％の子どもが「絵画教室」に参加し、26.1％が「英会話などの語学の教室」に参加している。この2種類の習い事の経営主体は異なるものである（図表省略）。「絵画教室」についていえば、その多くは幼児園が組織するもので「延長託児クラス」の性質を持つ習い事である。というのも、カリキュラム編成などの都合により、上海の正規の地域組織が経営する機関が開設する絵画の教室は一般に、4歳以上（すなわち年中クラスの年齢）の子ども向けだからである。このような習い事は普通、1週間に1回である。一方、英会話教室の状況は逆であり、子どもたちは地域組織が開設する教室に参加するのが一般的である。なぜなら、上海では英会話教室は、地域組織が初めに推進し始めたものであり、その経営システムや市場運営がいずれも比較的成熟しているからである。幼児園のこれへの参入は、多くが関連カリキュラムを幼児園の通常の教育活動のなかに組み込むか、あるいは会場を提供し、週末に開講させて、一定の仲介費用を受け取るものである。これは同時に、幼児にとっては近くに通えるという利便性もある。このタイプの習い事は

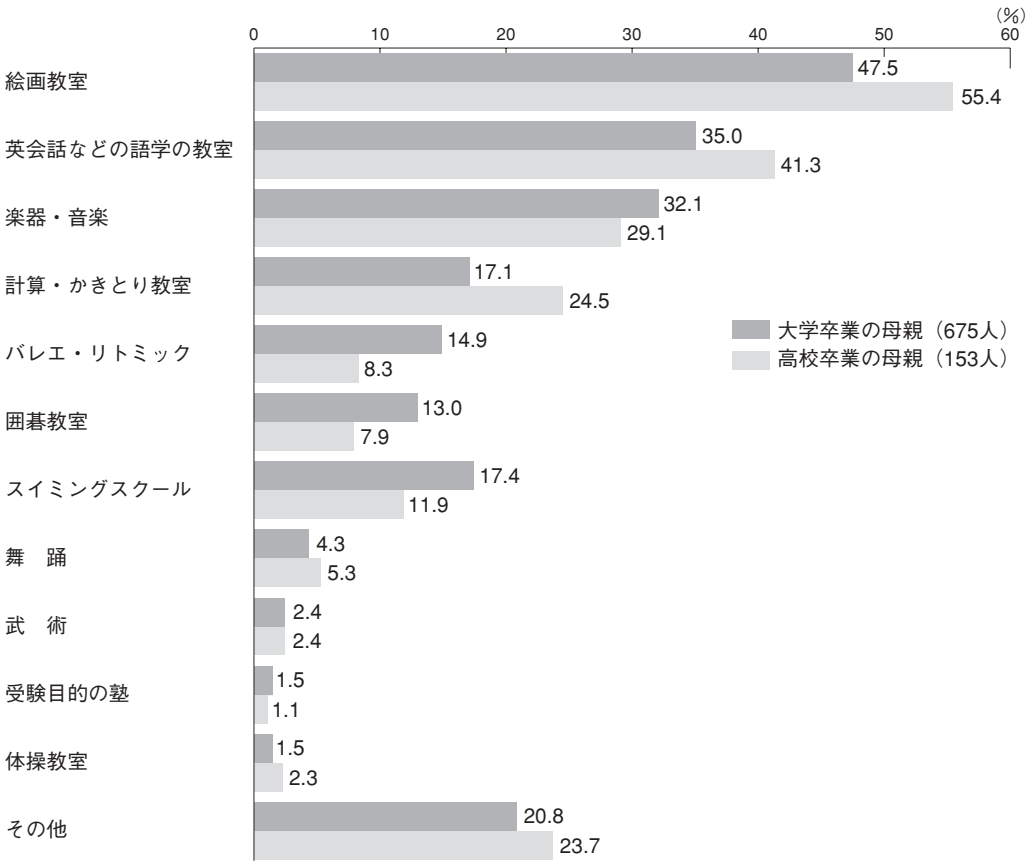
普通、１週間に２回から３回である。

母親の学歴を「中学校、高等学校、職業高等学校」（以下、「高校卒業の母親」）と「短期大学、四年制大学、大学院」（以下、「大学卒業の母親」）に分け、母親の学歴別の分析を行ってみよう。

習い事に参加している子どもの割合と母親の学歴との関係からみると（**図２**）、参加する割合が母親の学歴の高さに反比例（すなわち母親の学歴が高くなればなるほど、参加割合が低くなる）し、その差が５ポイント以上みられたのは、「絵画教室」「計算・かきとり教室」「英会話などの語学の教室」であった。「囲碁教室」「バレエ・リトミック」「スイミングスクール」の参加比率はいずれも母親の学歴の高さと正比例している。このように、母親の学歴によって習い事の選択の傾向は異なる。

このほか、「その他」の具体的な内容をみると、上海の就学前の幼児が比較的多く参加している習い事には、ほかに手芸、書道などがある。上海の就学前の幼児が習い事をしていない比率は21.6%であることがわかった。一方、北京は35.4%に達している（図表省略）。習い事を含めた１か月の子どもの教育への支出の費用では（**表２**）、上海の保護者の平均額は405元で、北京の平均額290元を大きく上回る。これは今回調査した家庭の収入水準と関係がある。調査対象の上海の家庭の平均月収は北京のそれを上回っている。しかし、こ

■図２　習い事の種類（上海　母親の学歴別）



注１）複数回答。
注２）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

れは上海の保護者のほうが習い事への参加により熱心で投資を惜しまないからだという可能性を排除するものではない。

（３）メディアとの接触

今回の調査によれば、上海の就学前の幼児が接触している割合が最も高いメディアはテレビである。「ほとんど毎日」見る子どもの比率は64.3%で、第２位の「絵本」を「ほとんど毎日」読む子どもの42.8%をはるかに上回る（p.170 基礎集計表）。しかも年齢別（３～６歳児）にみても、ほとんど変わらない（図表省略）。１日の平均テレビ視聴時間をみると、「30分未満」が2.0%、「30分～１時間未満」が23.3%、「１時間」が41.7%、「２時間」が22.1%であった（p.171 基礎集計表）。しかも、母親の学歴が高いほど、子どもにテレビを見せる時間をより厳しく制限しているという傾向があった（図表省略）。

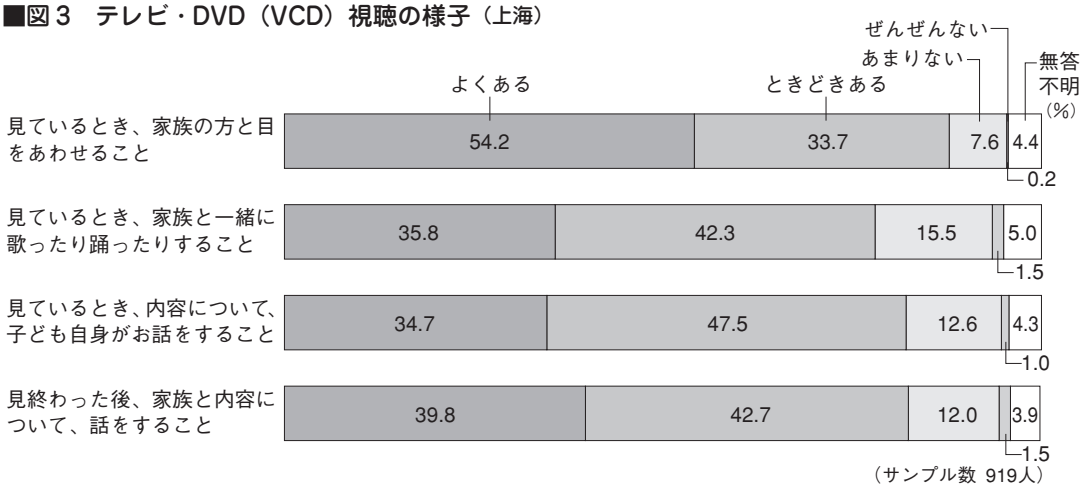
子どものテレビ番組への反応からみると（**図３**）、子どもはテレビ番組に非常に熱中し、その影響を強く受ける。テレビを「見ているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりする」子どもは78.1%（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）で、テレビを「見ているとき、家族の方と目をあわせること」は87.9%、「見ているとき、内容について、子ども自身がお話をすること」は82.2%であり、「見終わった後、家族と内容について、話をする

■表２　平均教育費

東京（997人）	ソウル（926人）	北京（953人）	上海（908人）	台北（2241人）
10,221円	96,478ウォン	290元	405元	3,456元

注１）平均教育費は、「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。また、無答不明の人は、分析から除外している。
注２）１ウォン（韓国）＝0.116円、１元（中国）=14.833円、１元（台湾）＝3.581円（2005年12月13日現在）

■図３　テレビ・DVD（VCD）視聴の様子（上海）



注）「テレビ」「DVD（VCD）」をいずれか１つでも「ほとんど毎日」「週に３～４日」「週に１～２日」「ごくたまに」見ている人のみ分析。

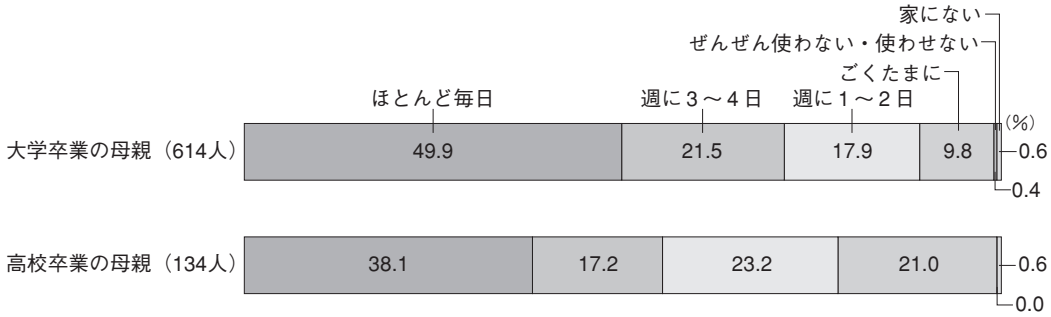
こと」は82.5%であった。

幼児向けのテレビ番組が少ない、品質もよくない、子どもがおとな向けのテレビ番組をつねに目にしているなどの現状への憂慮から、ここ数年来、数多くの学者が「子ども時代の喪失」への警鐘を鳴らし、保護者や社会に注意を呼びかけている。さらには、子ども自身に子ども番組の選出や制作にあたらせようという呼びかけさえ出ているほどだ。

伝統的な印刷メディアである絵本は、テレビとの接触頻度には及ばないが、テレビに次いでよく読まれている。上海の子どものうち、週に3～4日以上（「ほとんど毎日」＋「週に3～4日」）「絵本」を読んでいるのは61.1%である（p.170 基礎集計表）。子どもの性別にみると、「ほとんど毎日」読んでいる女子は46.7%、一方男子は39.0%で、女子が男子を7.7ポイント上回った（図表省略）。絵本との接触頻度は母親の学歴とも関係がある。母親の学歴別にみると（**図4**）、「大学卒業の母親」をもつ子どもの49.9%は「ほとんど毎日」絵本を読んでいる。一方、「高校卒業の母親」をもつ子どもは38.1%しかなかった。

上海の就学前の幼児の接触頻度が比較的高いメディアとしては、DVD（VCD）もあげられる。週に3～4日以上（「ほとんど毎日」＋「週に3～4日」、以下同様）見る幼児の比率は36.6%である（p.170 基礎集計表）。子どもの性別にみると、男子は38.0%、女子は35.1%で、男子が女子よりもDVD（VCD）との接触頻度が高い（図表省略）。さらに、調査結果から、DVD（VCD）を視聴する時間はテレビより短いこともわかった。DVD（VCD）を視聴している（「ほとんど毎日」＋「週に3～4日」＋「週に1～2日」）と回答したのは66.9%であった（p.170 基礎集計表）。また、38.8%の子どもはDVD（VCD）を見るのが1日平均1時間未満（「30分未満」＋「30分～1時間未満」）で、「1時間台」は28.7%であった（p.171 基礎集計表）。

■図4　絵本の使用頻度（上海　母親の学歴別）



注1）無答不明は除いて算出している。
注2）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

２．母親の意識

（１）子育てに関する意識

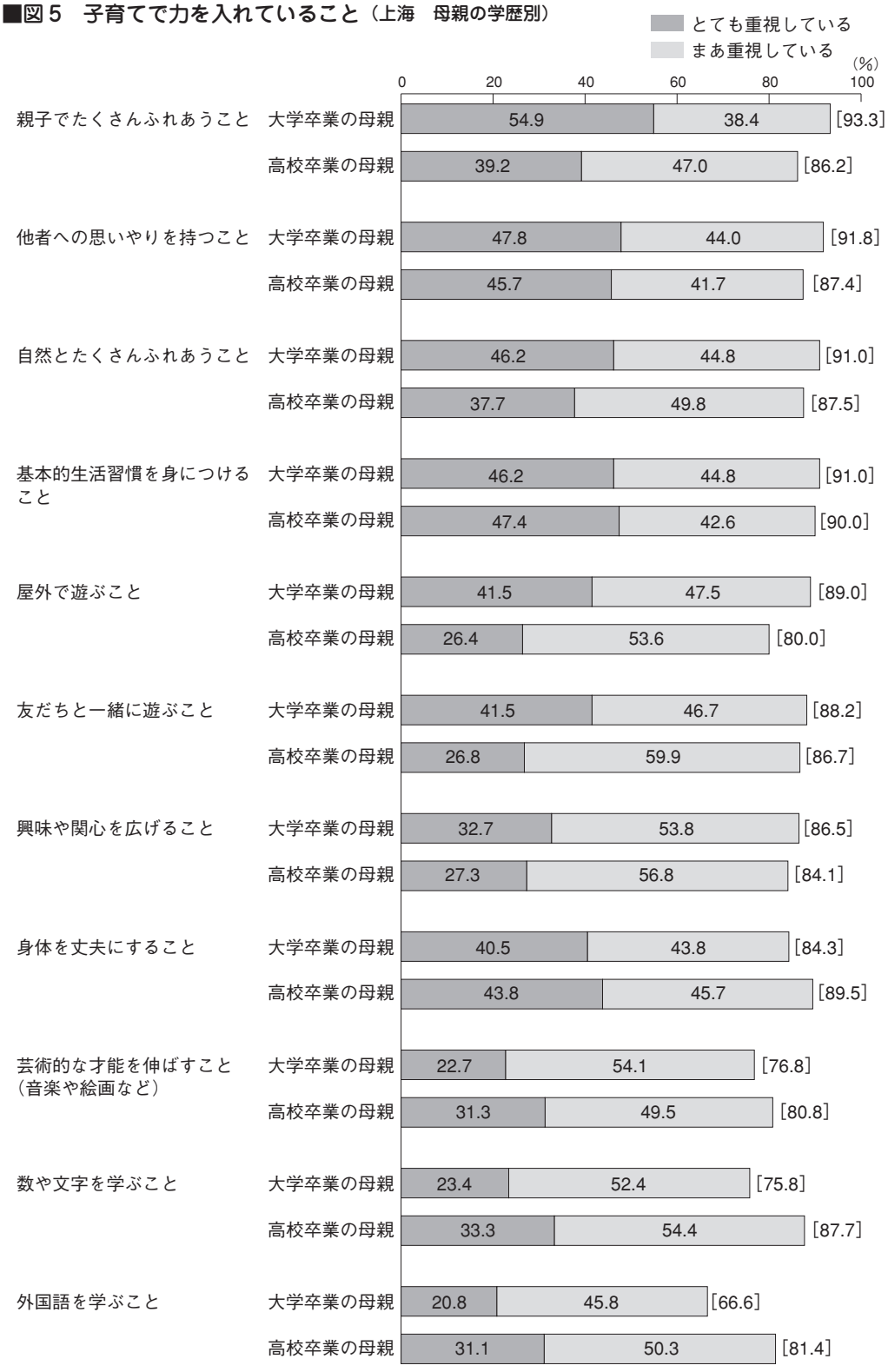
１）子育てにおいて重視すること

子育てにおいて重視していることをたずねた（p.75 表２－３－１）。保護者が重視している上位３項目は、順に「親子でたくさんふれあうこと」91.4％（「とても重視している」＋「まあ重視している」、以下同様）、「他者への思いやりを持つこと」91.2％、「基本的生活習慣を身につけること」90.5％である。それに対して、重視していない３項目は順に「外国語を学ぶこと」25.8％（「あまり重視していない」＋「ぜんぜん重視していない」、以下同様）、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽・絵画など）」18.5％、「数や文字を学ぶこと」17.0％であった（p.173 基礎集計表）。このデータは、上海の母親は「知育を非常に重視している」という、人々が抱いている印象を少し修正するのに役立つかもしれない。

母親の学歴別にみると（**図５**）、「大学卒業の母親」と「高校卒業の母親」とでは、子育てにおいて重視することが異なる。両者の差がみられた項目を取り上げて、分析を行いたい。「大学卒業の母親」が「とても重視している」比率が「高校卒業の母親」より高く10ポイント以上差がみられた項目は、「親子でたくさんふれあうこと」（15.7ポイント差）、「屋外で遊ぶこと」（15.1ポイント差）、「友だちと一緒に遊ぶこと」（14.7ポイント差）である。一方で、「高校卒業の母親」が「とても重視している」割合が「大学卒業の母親」より上回っている項目もある。上述のような項目ほど差はみられなかったが、両者に５ポイント以上差がみられた項目をあげると、「外国語を学ぶこと」（10.3ポイント差）、「数や文字を学ぶこと」（9.9ポイント差）、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」（8.6ポイント差）がある。このことから、「高校卒業の母親」は子どもの技能の育成、知識の獲得をより重視し、一方、「大学卒業の母親」は子どもとの心の交流、子どもの社会性を伸ばすことをより重視していることがわかる。

子どもの年齢別にみてみよう。ここでたずねたほとんどの項目が、子どもの年齢が上がるにつれ、「とても重視している」と回答する比率が減少している。そのようななかで、５ポイント以上差がみられたのは「数や文字を学ぶこと」（３歳児25.0％＜６歳児30.9％）の１項目のみである（図表省略）。この現象は１つには子どもの年齢が上がるにつれ、母親が子どものエネルギーを数や文字の学習に次第に向けさせ、小学校の学習によりよく適応させ、人に遅れをとらないようにさせようと考えるからかもしれない。またもう１つには（こちらのほうがより直接的な理由かもしれない）、母親が現実に迫られてやむをえない選択をしているだけということもある。上海ではここ数年、質の高い小学校の数が保護者の良質の教育を求めるニーズに遠く追いついていない。そのために、幼児は、一部のよい小学校に入るのに選抜試験に合格しなければならない。進学から受けるプレッシャーの増大にしたがって、保護者は調整を余儀なくされ、幼児の時間を数や文字の学習により振り向けさせるしかないのである。

■図５　子育てで力を入れていること（上海　母親の学歴別）



（サンプル数 大学卒業の母親 521人、高校卒業の母親 112人）

注１）母親の回答のみ分析。
注２）[　　] 内は「とても重視している」＋「まあ重視している」の%。
注３）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

2）子どもに将来どんな人になってほしいか

将来どんな人になってほしいかたずねた(p.73 図2－2－1)。上位3位はそれぞれ「自分の家族を大切にする人」(75.7%)、「まわりから尊敬される人」(43.0%)、「仕事で能力を発揮する人」(39.0%)であった。北京の母親も「自分の家族を大切にする人」(71.8%)になってほしい比率が最高であった。少し大胆な推測になるかもしれないが、この1項目については、中国の母親にはあまり大きな異論は出てこないのではなかろうか。なぜなら、それは中国の伝統的な文化によるものであるからである。中国を2000年の長きにわたって支配してきた儒教思想の基本概念は「仁」であり、その本質的な意味は「孝弟なる者は其れ仁を為すの本か〔仁の根本は、親や年長者を敬う心(孝弟)である〕」(『論語』学而)である。それは家父長制の血縁関係から派生した倫理規範である。このため、人はまず家庭や家族の中の1人なのである。「孝」は高尚な美徳とみなされ、同時に基本的な道徳でもある。「身体髪膚これを父母に受ける、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり。身を立て道を行い名を後世に揚げて以って父母を顕わすは孝の終わりなり〔身体をむやみに損なわないようにすることが孝行の第一歩であり、出生し、立派な人物となり、自分を育ててくれた親の名を世に表すことが究極の孝行である〕」(『孝経』)ともある。孝を家族の人に及ぼすとは、つまり家族に対し責任と義務を負い、無条件に家族を大事にしなければならないということである。この伝統文化の観念は深く根づいているので、子どもに「自分の家族を大切にする人」になってほしいという割合が上海、北京ともに高いが、不思議はないのである。

一方「他人に迷惑をかけない人」という項目では、上海(4.6%)と北京(4.9%)のいずれの数値も最低であった。これも結局のところ、中国特有の文化によるものである。前述したように、中国の伝統的な文化においては人はまず家庭の中の1人、家族の中の人として存在する。家は同時にまた社会を構成する単位である。1つ1つの家が交わりつながって国家を形成する。個人もこの複雑なつながりに当たり前のように組み込まれている。個人は社会のつながりのなかにあって、単独の個体であるだけでなく、家庭の中の人であり、家族の中の人であり、社会の中の人である。人は誰もが必ず他の人と複雑な関係を持たざるをえない。つまり「人に迷惑をかける」のは必然的なことなのである。このようなつながりの過程のなかで、行ったり来たりの交流は双方向のお互いさまであって、迷惑もつまり当たり前の現象になるわけである。

3）子どもの進学に対する期待

調査結果によると、上海の母親の子どもの学歴に対する期待が大変高いことがわかる。39.0%の母親が大学卒業までの学歴を望み、56.3%の母親は大学院卒業を望んでいる。北京の母親の期待はさらに高く、24.9%が大学卒業の学歴を望み、71.5%が大学院卒業を望んでいる(p.77 図2－4－1)。昨今の中国に広く存在する極端な「学歴崇拝」現象をあらわすものである。これは中国の現有の受験体制に密接にかかわっている。高校入試から大学入試さらに大学院入試、博士課程入試まで、すべて試験に合格して進学するのであり、教育全体が入試をめぐって、入試に振り回されている。このことがもたらす暗黙の評価基準は試験に合格できた学生だけが優秀な人材であり、たくさんの入試に合格すればするほど、入試が難しければ難しいほど、その人の能力が高いことをあらわすことである。その結果は、学歴が高いほど、仕事が探しやすく、収入もより高いことになる。それに加えて、中国という人口大国においては、人材間の競争、生存をかけたプレッシャーがますます激化し、とくに、上海のような大都市においては、津々浦々からエリートたちが集まってくるので競争はさらに激烈になる。高学歴を得ることは生活の保障を得ることに等しいのである。子どもが将来の競争で確かな位置を占

めることができるように、苦労しないように、最善で最も穏当な方法は子どもに高学歴をつけさせることだ。したがって、「学歴崇拝」も母親たちの仕方がない選択なのである。

このほか、子育て観をたずねた項目で（p.71 図２－１－１⑦）、上海の母親が「世間で名の通った大学に通ってほしい」と回答した比率は79.3％と高く、北京の74.1％よりさらに若干高い。こうみると、母親には「学歴崇拝」のほかに「名門大学信仰」もあるようだ。その延長線上では、高校、中学校、小学校、幼児園までもその信仰の対象になってくる。実際、それも当たり前のことでもある。学歴は縦方向の比較でしかなく、横方向には名門大学と一般の大学の間の比較がある。このため、単に学歴だけでは母親の心の中の不安を取り去るには不十分なのだ。もしそれに加えて名門大学という確かなカードがあれば、母親の心に潜んでいる心配もほぼ解決できてしまうだろう。

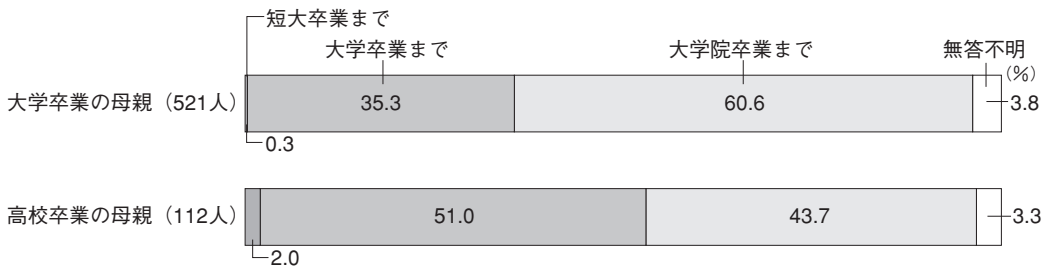
さらに子どもの性別でみると、母親の男子への学歴期待が女子よりも高いことがわかる。女子に「大学卒業まで」の学歴を望む母親は45.6％、「大学院卒業まで」を望む母親は50.４％であった。それに対し、男子に「大学卒業まで」の学歴を望む母親は32.2％だが、「大学院卒業まで」を望む母親は62.3％という高い比率であった（p.77 図２－４－１）。また母親の学歴別にみると（**図６**）、母親の学歴が高ければ高いほど、子どもの学歴に対する要望も高いようだ。子どもに大学卒業の学歴を望む比率をみると、「高校卒業の母親」は51.0％で、「大学卒業の母親」は35.3％であった。さらに、子どもに大学院卒業を望む比率は、「高校卒業の母親」43.7％、「大学卒業の母親」60.6％であった。ここにその一端がうかがえる。

４）母親の子育て意識について

私たちは、上海の母親が子育てにある程度の不安を抱いていることに気がついた（p.78 表２－５－１）。64.4％（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）の母親が「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」があると感じている。50.5％の母親が「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」がある感じている。また「いつも子どもの安全と健康を心配していること」があると64.0％の母親が回答している（p.176 基礎集計表）。

母親の子育てに対する否定的感情がこれほど高い理由は何だろうか。上海の就学前の幼児の成長に多くの問題が実際に存在するからなのだろうか。そうかもしれないが、１つの都市において半数を超える子どもがみな成長上の問題に直面しているという可能性はとても低い。この問題の最も大きな要因は、母親自身に存在するのかもしれない。伝統的な文化と一人っ子政策の影響（本調査の結果をみると、上海では一人っ子は71.9％を占める、

■図６　子どもの進学に対する期待（上海　母親の学歴別）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

p.8 図A－3）を受けて、母親が自身の期待をただ1人のわが子に託しがちであるため、ストレスが生じやすくなると考えられる。しかも、日々激烈になる競争によって、母親は子どもがまもなく直面するであろう成長段階のプレッシャーを感じとり、悩みが深まるのである。

しかし、不安をある程度感じながらも、上海の母親は子育てに高い幸福感、満足感も示していることも確かだ。また、自分の子どもの成長を積極的に評価している。たとえば、「子育てによって自分も成長していると感じること」の比率は80.6%（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）であり、「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」は90.2%で、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」は91.0%である（p.176 基礎集計表）。子どもの成長に対して、満足している母親は91.3%（「とても満足している＋まあ満足している」）いる。「自分の子どもが他人の子どもより劣っている」とは思っていない（「あまりない」＋「ぜんぜんない」）母親は75.8%である（p.176 基礎集計表）。

母親の育児における幸福感や満足感は、一方では、中国の伝統思想のなかの子どもを自己の生命の延長とみなす考え方から来ている。また一方では、母親は育児の主要な担い手として、子どもの成長がもたらしてくれる楽しさをより強く感じ、達成感をより感じることができるからである。そして、母親の子どもへの積極的な評価は、ある程度、自分自身の子育てに対する肯定でもあるといえる。また、現実と照らし合わせても、今回の母親の子育て意識についての回答は比較的客観的なもののはずである。

では、これと前述した母親が抱いている育児に対する否定的感情の高さとは矛盾しないのだろうか。実は矛盾しないのである。私たちが前段で分析したように、母親の育児に対する不安はある程度自分自身の要素なのであって、子どもの成長に何らかの問題があるのではない。子どもの成長に対する積極的な評価と自分自身の育児に感じている不安は、母親の現実の状態と抱いている期待の2者の矛盾をまさに表しているのである。

（2）上海の母親に関して

1）母親の仕事

上海市婦女連合会が上海の16〜50歳の女性の就業状況に対して行った調査によれば（2005年3月4日付『第一財経日報』）、上海の女性の就業に関しては、40〜50歳の女性には、あまり問題はなくなっており、問題は主に20〜30歳の女性に集中するようになっている。研究者の分析によれば、この20〜30歳の女性が適した仕事を見つけられないのは、自身の切迫感があまり強くないことと関連しており、同時にこの年齢層の女性は考え方が比較的保守的で、安定した仕事に従事することを好み、かつ給料に対しても比較的高い要求を持っている。

そのほか、上海市婦女連合会の調査では、非正規の就業がすでに上海の女性の就業率の新たな成長点になっていることを示した。目下、非正規な就業形態にいる女性は上海の就業している女性全体の約14%を占めている。非正規就業の女性には、自営形態で融通が利く就業者（すなわち自由業や個人経営者）、大中規模の企業に雇用される臨時工・時給工・労務工（当地に戸籍を持たない）・季節工、小規模企業や零細企業に雇用される給与労働者、臨時の仕事や散発的な仕事に従事する融通が利く就業者などが含まれる。

今回の幼児の生活アンケートにおいて、上海の母親が常勤の仕事に従事する数値が思ったよりも低かった理由は、上記の調査結果から理解することができる。さらに、「高校卒業の母親」の就業状況で「専業主婦」と「フリー（在宅ワークを含む）」の割合が高かったことに対する理由もうかがえる。

注目に値するのは、常勤の仕事に従事している母親の比率と母親自身の学歴の高さが正

比例しているという点である。大学卒業の学歴を持つ母親が常勤の仕事に従事している比率は76.1%にのぼっているのに対し、「高校卒業の母親」が常勤で働いている比率は31.9%にすぎない（**図7**）。さらに、仮に常勤で働いていたとしても、週に6日以上（「週に6日」＋「週に7日」）働いている比率は、「高校卒業の母親」が33.8%であるのに対して、大学卒業の学歴を持つ母親はわずか7.8%しかいない（図表省略）。こうした実態が「高校卒業の母親」が常勤の仕事に従事するのを少なくし、「専業主婦」と「フリー（在宅ワークを含む）」を増やす原因の1つかもしれない。

2）母親の学歴と子育て

調査データをみると、母親の学歴は母親の子育てに対し重要な影響を及ぼしている。しかし、母親の学歴によって子育てに関する意識や子育てにおける行動がすべて異なっているわけではなく、時には同じこともある。

差がみられるのは、前段でみた就業状況と就業形態および、前述した習い事の選択傾向である。このほか、大学卒業の学歴を持つ母親は、子育てにおいて、子どもとの交流を増やすこと、子どもを戸外で遊ばせること、大自然と触れ合わせること、他の子どもたちと一緒に遊ばせることなどをより重視するが、「高校卒業の母親」はこれらの面での重視度は相対的に少し低いこともあげられる。また、数や文字の学習、外国語学習、芸術的な才能を伸ばすという面においては、「高校卒業の母親」の「重視する」度合いが「大学卒業の母親」を上回った。

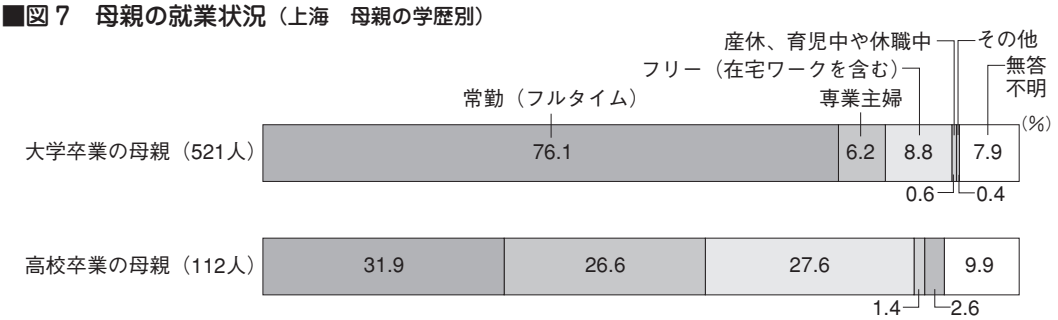
また、子どもの将来への期待の面では（**図8**）、「高校卒業の母親」は子どもが「人より抜きん出る」ことに大きな期待を寄せているが（「リーダーシップのある人」では、「高校卒業の母親」31.6%＞「大学卒業の母親」23.7%、「まわりから尊敬される人」56.4%＞41.5%）、一方、「大学卒業の母親」は、子どもの生活が快適で余裕があることにより大きな期待を抱いている（「のんびりと生きる人」では、「大学卒業の母親」15.1%＞「高校卒業の母親」11.5%）。これらを除いては、将来の経済状態への期待を含め他の多くの項目で、母親の学歴と関係なく、選択は比較的接近している。

（3）父親の育児と家事への参加状況

今回の調査結果は、第一に、上海の父親は北京の父親よりも帰宅時刻が遅いことを示した（p.87 図3－1－1）。上海の父親の帰宅時刻のピークは「18時台」から「20時台」に集中している。北京の父親の帰宅時刻のピークが「17時台」から「19時台」に集中しているので、北京は上海より丸々1時間早い。

第二に、北京の父親は上海の父親より育児と家事に参加していることがわかる。これは

■図7　母親の就業状況（上海　母親の学歴別）

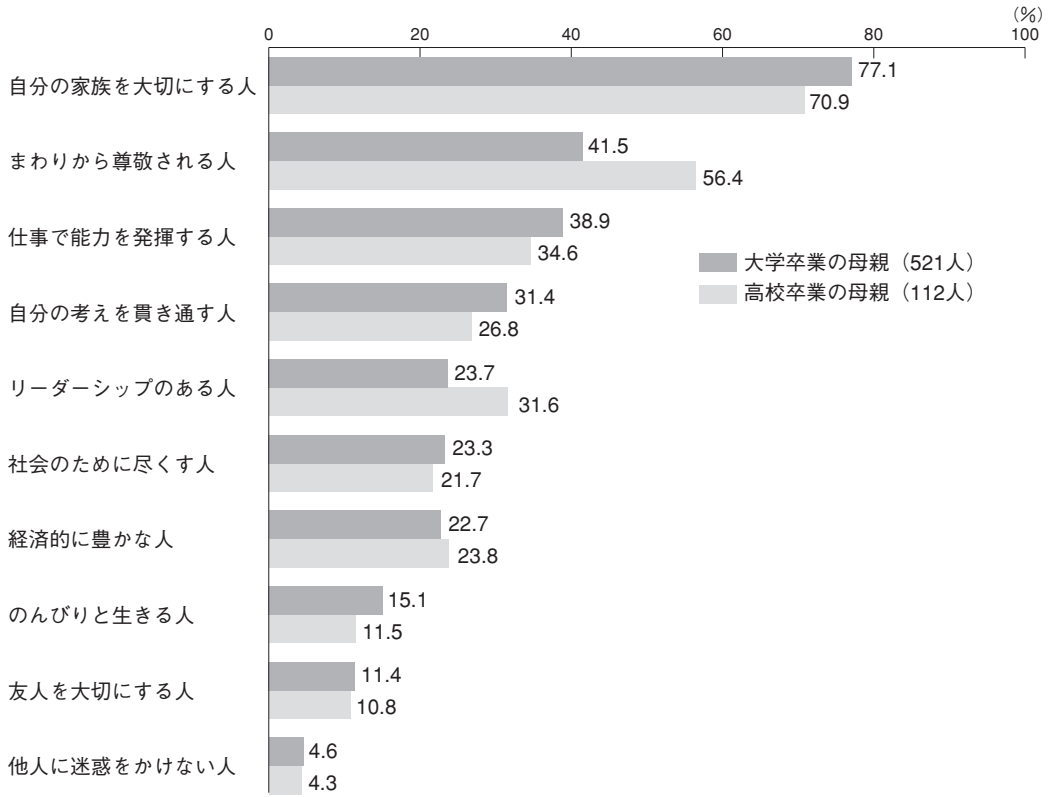


注1）母親の回答のみ分析。
注2）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

私たちが日常抱いている印象と大きな差がある。というのは、一般に中国の北地方の男性は家事への参加が少なく、それに対して、中国の南地方の男性は家庭を比較的かえりみると考えられており、北京と上海の男性はまさにそれぞれの代表だからである。だが、私たちは第一で述べた父親の帰宅時刻の結果を用いて、第二で述べた父親の育児、家事への参加状況の結果を説明してもよいのではないだろうか。

妻の立場からみれば、上海の女性は一方では夫の育児および家事参加の度合いに比較的高い満足感を抱いている（「とても満足している」＋「まあ満足している」比率は半数を超えている）。一方ではまた、彼女たちは夫にもっと育児や家事に参加してほしいと考えてもいる（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」比率は70%以上）。そして、育児と家事という２つの項目では、妻は夫に対し家事よりも育児により多く参加してほしいと考えている（97.4%）。おもしろいことに、北京の女性のほうが、夫の家事への参加により高い満足度を示している（北京57.9%、上海50.6%）。同時にまた夫の家事への参加をもっと増やすことにより高い期待を寄せているのである（北京83.8%、上海74.8%）（p.94 図３−３−１〜４）。

■図８　子どもの将来に対する期待（上海　母親の学歴別）



注１）10項目の中から、３つまで選択。
注２）母親の回答のみ分析。
注３）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

（４）子育て支援

１）子どもを預ける人とサービス

調査は、上海では母親が仕事以外で不在のとき、77.3%の子どもは父方の祖父母（母方の祖父母）あるいは親戚によって世話され、21.8%はベビーシッター・お手伝いが世話をし、15.6%は父親が世話をしていることを示した（p.101 図４－１－３）。そして、その他のサービス機関の介入はわずかであった。このようにみると、この面での地域のサービスはまだ成熟しているとはいえない。

２）幼児園への要望

上海の母親の幼児園への要望のうち、上位3位は「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」96.0%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様）、「集団生活のルールを教えてほしい」95.9%、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」94.2%であった（p.103 図４－２－１）。「知的教育を増やしてほしい」91.4%という項目は第4位に続く。上海の母親は知的教育への要望は比較高いとはいえ、やはり「人とのかかわり」（子ども同士のかかわり、保護者同士のかかわり）や、子どもの集団生活への適応をより重要な位置においていることを説明しているのかもしれない。知的教育が重視されているのに変わりはないが、母親たちの目は子どもの行動習慣を培うことやＥＱ（こころの知能指数）を伸ばす方向などに次第に転じつつある。上海の母親の要望が比較的高い項目の中には、さらに「子育て相談ができる場所になってほしい」92.1%もある。こうみてくると、幼児園は母親に対するサポートという面で、さらなる努力をしなくてはならないようである。

4

台北の結果と分析

蔡　春美（国立台北教育大学幼児教育学部教授）

今回台北で行ったアンケートの回答数は計2,259人で、そのうち大多数は母親による記入であった（母親81.0%、父親16.7%）。子どもの幼児教育機関入園状況については、幼稚園が多数を占め、次に託児所と未入園者であった（幼稚園児61.3%、託児所児13.7%、未就園児22.6%）。統計結果に基づき（p.168 基礎集計表）、注目すべき結果を以下にあげる。

１．幼児およびその家庭の基本状況

（１）１家庭における子どもの数は２人が多い

調査した2,259世帯の中で、子ども２人の家庭は59.4%を占め、一人っ子は28.8%であった。性別は男子50.1%、女子49.9%で、おおむねバランスがとれている（p.8 図Ａ−１・３）。

（２）核家族が多い

父方の祖父母や母方の祖父母と同居していない核家族が55.2%を占めた。祖父との同居は31.4%、祖母との同居は40.5%であったが、母方の祖父母との同居は少数であった。ここから台北の幼児をもつ家庭の半数以上が核家族であることがわかる（p.11 表Ｃ−１）。

（３）家庭収入は中の上程度が多い

家庭の年間収入についての問いに無答不明は1.1%だけであった。幼児をもつ家庭における収入格差は大きいが、比較的多いのは「91万〜100万元」と「101万〜150万元」の２つの層で、それぞれ15.6%、24.4%と計40.0%を占めている（p.184 基礎集計表）。台北において100万元前後の収入は中の上程度に属する。統計によれば、台湾における一般国民の平均年収は約87万元であるが、調査対象である幼児家庭の40.0%が100万元前後である。したがって、調査は台湾の一般家庭の経済状況を代表しているわけではない。

（４）幼児の父母の年齢は30〜40歳が多い

調査対象の父親の年齢は「31〜35歳」(26.1%)、「36〜40歳」(43.0%)、「41歳以上」(22.8%) の３つの年齢層に集中しており、合計91.9%となっている。一方、母親の年齢は「26〜30歳」(15.6%)、「31〜35歳」(39.1%)、「36〜40歳」(35.2%) の３つの年齢層に集中しており、合計89.9%となっている（p.10 図Ｂ−２〜３）。母親の年齢は一般に父親より若い。これは台湾における一般の結婚スタイルの男女の年齢比と大いに関係がある。幼児の平均

年齢５歳をもとに父母の出産年齢を推定すると、いずれも26歳から35歳の間であり、親として心身ともに成熟年齢に達していたことがわかる。

（５）幼児の父母の学歴は短期大学卒業が３割程度

父親の学歴は短期大学（27.9%）と四年制大学（28.7%）に集中している。大学院も16.4%存在し、３者合わせると73.0%を占める。一方、母親の学歴は多くが短期大学（33.9%）と四年制大学（30.3%）に集中しており、また18.8%が高等職業学校で、３者合わせて83.0%である。母親の学歴が短期大学である比率は父親を大きく上回る（p.11 表Ｂ－２～３）。台北市には大学が多く、就学機会は男女平等であり、近年若干の短期大学で女子学生が男子学生を上回る現象がみられることと、父母の学歴がいずれも依然として上がっていることに注目すべきである。また、インターネットの使用状況からみると、「週に３～４日」から「週に５日以上」インターネットを使用する保護者の比率は42.0%、インターネットを「まったく使っていない」保護者は11.5%であった（p.11 図Ｃ－１）。ここから、現在はインターネットを使用して情報を検索することができる保護者も次第に多くなっていることがうかがえ、今後インターネット運用などデジタル関連を学ぶ向きも増加するであろう。

２．幼児の生活状況

（１）幼児の生活には、遅寝の傾向がみられる

台北の幼児の起床時刻は「７時頃」(22.6%)、「７時半頃」(25.2%)、「８時頃」(24.1%）に集中し、合計71.9%となっており、それぞれは全回答の４分の１前後を占める（p.46 図１－１－１）。就寝時刻も「21時半頃」(20.0%)、「22時頃」(29.3%)、「22時半頃」(24.6%）に集中しており、合計73.9%となっている（p.48 図１－１－５）。どの年齢の子どもも「７時半頃」起床、「22時頃」就寝が最も多く、回答のおよそ３分の１を占めている。北京や上海の幼児に比べ、起床時刻は約30～40分遅く、就寝時刻も約40～50分遅い（p.51 図１－１－９）。子どもたちの夜の睡眠時間はおよそ９～10時間の間であり、昼寝の約１～２時間を加えると、１日のトータルの睡眠時間は10～12時間である（図表省略）。台北市のほとんどの家庭がテレビを所有しており、テレビは24時間、番組を放送している。またデパートは通常22時まで営業している。多くのおとなたちは就寝が遅く、子どもたちもおとなのリズムに合わせて、遅くまで起きていることが多い。気をつけないといけないのは健康への影響である。

（２）幼児の習い事（才藝班）は普通のことになっている

台北の幼児の習い事には２種類ある。１つは幼稚園や託児所で行われるもので、多くが午後や保育時間終了後である。もう１つは塾あるいは幼児託児保育センター（安親班）に行って参加するもので、保育時間終了後や休日の土曜である。

今回の調査は56.4%の幼児が習い事に参加していることを示した（p.54 表１－２－１）。女子が男子より習い事をしている比率が高く（女子58.5%＞男子54.4%、図表省略）、年齢別にみると、年齢が上がるにつれて、している比率も高くなっていることを示した（６歳児77.8%、５歳児71.5%、４歳児51.3%、３歳児25.0%）。３歳児を除き、４、５、６歳児ではいずれも半数以上が参加し、６歳児では４分の３以上に達している。習い事の種類をみ

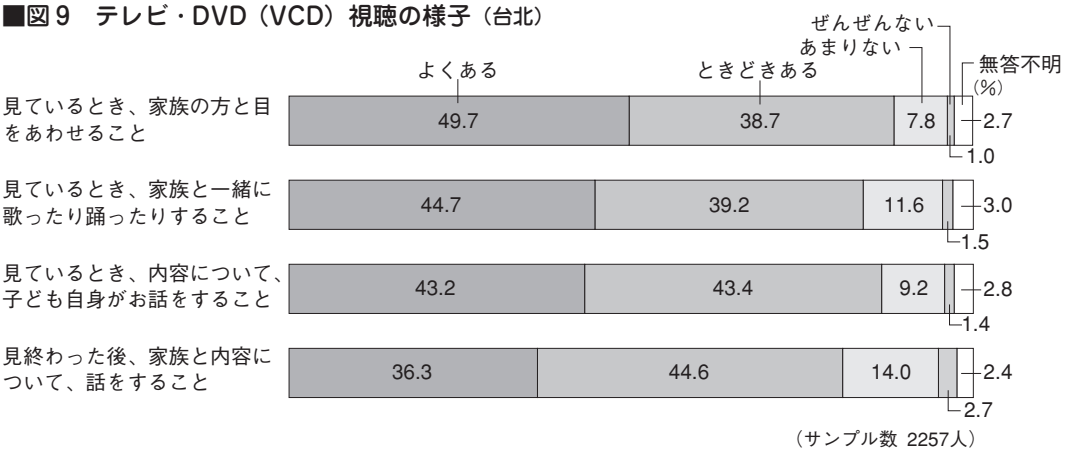
ると（p.56 図１−２−１）、「絵画教室」に通っている比率が最も高く（24.5%）、「英会話などの語学の教室」（19.4%、台北では子どもが外国語を学習するというのはイコール英語学習である）、「楽器・音楽」（17.2%）、「バレエ・リトミック」（14.2%）と「計算」（12.6%）と続いている。この調査では、母親に現在通っている幼稚園・託児所への要望をたずねている。その中で、「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」という項目では、「とてもそう思う」が23.1%、「まあそう思う」が48.5%と、肯定的な回答が合計71.6%に達していることがわかる（p.180 基礎集計表）。習い事についての結果は、この幼稚園・託児所への要望の結果を裏づけるものとなった。ここから保護者の習い事に対する期待がみてとれる。

（３）テレビはすでに幼児の家庭生活の核になっている

今回の調査は78.4%の幼児がテレビを「ほとんど毎日」見ていることを示した。テレビの視聴状況については年齢による差はあまりみられない。ラジカセ（CD）を「ほとんど毎日」使用する幼児が33.0%であるのに対し、DVD（VCD）やパソコンの使用は少ない。多くは「ごくたまに」使用する程度であるDVD（VCD）を「ごくたまに」使用30.1%、パソコンを「ごくたまに」使用35.2%）。そしてテレビゲームを使用する幼児はさらに少ない。47.5%の家庭は、もともとテレビゲームを所有していない（p.170 基礎集計表）。これは、幼児の視力保護の角度から、パソコンなど目の負担になる機器への早すぎる接触は避けようと、教育関係者が近年保護者に絶えず呼びかけていることといくらか関係があるようだ。しかし、今回の調査で、実際のテレビ視聴時間をみると、毎日テレビを「１時間」見る子どもは32.8%、「２時間」は26.7%、「３時間」は14.7%と、合計74.2%を占めている。他の現代メディアとの接触時間があまり残っていないのかもしれない（p.171 基礎集計表）。

幼児のテレビやビデオ・DVD（VCD）視聴時の様子については（**図９**）、大部分が目や表情で家族と感情交流をしている。「見ているとき、家族の方と目をあわせること」（「よくある」49.7%、「ときどきある」38.7%、合計88.4%）、「見ているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりすること」の比率も高く（「よくある」44.7%、「ときどきある」39.2%、合計83.9%）、「見ているとき、内容について、子ども自身がお話をすること」の比率も高い

■図９　テレビ・DVD（VCD）視聴の様子（台北）



注）「テレビ」「DVD（VCD）」をいずれか１つでも「ほとんど毎日」「週に３〜４日」「週に１〜２日」「ごくたまに」見ている人のみ分析。

(「よくある」43.2%、「ときどきある」43.4%、合計86.6%)。また「見終わった後、家族と内容について、話をすること」の比率も低くはない(「よくある」36.3%、「ときどきある」44.6%、合計80.9%)。台湾のテレビ局は20局前後とかなりの数にのぼり、100チャンネル以上が放送されている。その中で、幼児向けアニメ番組が24時間連続して放映されているので、幼児にとってテレビ番組は生活のなかでなくてはならない存在となっている。テレビ視聴時間が長すぎると、他の活動時間に影響を及ぼしてしまうので、テレビの功罪については踏み込んだ検討が必要である。

一方、45.1%の幼児が「絵本」を「ほとんど毎日」読んでいる結果も出ている。それは喜ばしいことである。「週に3～4日」読んでいる幼児23.1%を加えれば、68.2%の幼児がつねに幼児向け絵本に接している(p.170 基礎集計表)。また、母親の就業状況別にみると、ほぼ毎日子どもと一緒に絵本を読んでいる専業主婦は53.4%を占めるのに対し、常勤で働く母親では40.7%にすぎない(図表省略)。専業主婦は比較的時間に余裕があることと関係があるのであろう。近年、台湾では多くの幼児向け絵本が出版されており、幼稚園や託児所の歌の教材やドリルの中にも絵本の形態で出版されるものがある。幼児向け絵本を制作する出版社は40～50社にのぼり、数多くの絵本がDVD、CDやカセットテープ付きで出版されているため、子どもが本を見ながらカセットテープ(CD)を聞くことが当たり前になっている。保護者も保育時間終了後に家で学習ドリルや、ワーク、英語のカセットテープ、DVDなどで学習してほしいと考えている。このため、「ワーク」を「ほとんど毎日」する子どもは24.7%、「週3～4日」の子どもが22.5%で、合計47.2%とほぼ半数の子どもたちはかなりの頻度でワークをやっている。一方、「学習用教具・知育玩具」の使用については、「ほとんど毎日」使用する子どもは19.7%にすぎず、「週3～4日」19.0%を合わせると合計38.7%であるが、その使用頻度は絵本やワークより低い(p.170 基礎集計表)。

3．母親の子育てに関する意識

(1)母親は幼児のさまざまな活動を非常に重視している

アンケートでは実際の生活のなかで幼児がよく参加する活動をあげ、これらの活動に対する保護者の重視の度合い(「とても重視している」+「まあ重視している」)をみてみた(p.75 表2－3－1)。

これらのデータから、台北の母親が「基本的生活習慣を身につけること」98.8%、「友だちと一緒に遊ぶこと」94.9%、「身体を丈夫にすること」94.5%など、人格や品行、子どもの人間関係、体の健康を非常に重視していることがわかり、大変喜ばしいことである。しかし、「数・文字・注音符号を学ぶこと」85.9%、「外国語を学ぶこと」78.9%、「芸術的な才能を伸ばすこと(音楽や絵画など)」84.3%など、知識や才能、学習を重視する母親も80%前後に達し、大多数の母親が知的教育を非常に重視していることもわかる。幼稚園・託児所への要望のなかに、幼稚園に「知的教育を増やしてほしい」について、「とてもそう思う」と答えた母親は48.7%、「まあそう思う」が43.2%で、両者合わせて91.9%に達した(p.180 基礎集計表)。知的教育の面において、母親の子どもに対する期待がどれほど切実であるか、ここからもわかる。

前述した幼児の基本的生活に関するデータからみると、テレビを毎日2時間くらい、DVD(VCD)を1時間くらい、また習い事もしなければならないとすると、幼児にとって、あまっている時間があまりなく、戸外で大自然に接触できる時間はかなり限られてしまうであろう。

（２）母親の子どもの将来に対する期待はかなりポジティブである

子どもに将来どのような人になってほしいかという質問に関しては、10項目を設けた（３つまで選択）。調査結果をみてみよう（p.73 図２－２－１）。

台北の母親の子どもの将来に対する期待はポジティブであり、かつ儒教の影響を受けて、「自分の家族を大切にする人」84.1％がトップになっている。次が「仕事で能力を発揮する人」48.9％、「社会のために尽くす人」26.7％である。意外なことに、「経済的に豊かな人」が21.5％でほぼ５人に１人と、比率としてはあまり高くないものの、それでも北京の15.1％に比べると高い。一方、「友人を大切にする人」は13.9％にすぎず、功利主義が幅を利かせる都市生活にあって、母親が人とよい人間関係づくりやそれへの配慮をいささか軽んじていることには留意すべきである。

（３）子どもへの学歴期待が高すぎる

今回の調査によれば、子どもの最終学歴に対する母親の期待は「大学卒業まで」が31.9％、「大学院卒業まで」が61.6％で、両者合わせて93.5％にのぼった。「大学院卒業まで」は、男子に望むのは63.8％、女子に望むのが59.3％であり、若干男子に対する期待のほうが高かった（p.77 図２－４－１）。子どもの学歴に対する期待が高すぎることには注意を要する。というのは、社会の人口比率と子どもの大学進学機会からみると、全員が大学を卒業するのは不可能であり、このような現実的でない期待は往々にして子どもにプレッシャーを与え、母親にも育児不安をもたらすからである。母親の子育て観に関する質問では、「世間で名の通った大学に通ってほしい」を選択した母親は34.3％、「大学進学や学校名にはこだわらない」は65.2％であり、子どもの学歴への期待と母親の子育て観との結果にいささか食い違いがある（p.71 図２－１－１⑦）。台北の母親は、一方で子どもに大学進学を期待し、一方で子どもに大変な思いをさせたくないと考えているようである。ゆえに65.2％の母親は「大学進学や学校名にはこだわらない」を選択したのだろう。だが依然として３分の１の母親が有名大学への進学を子どもに期待している。

（４）保護者からみた子どもの性格と母親の子育て観

子どもの性格について聞いた結果をみてみよう。データから、台北の保護者は、自分の子どもが明るくて前向きな性格だとみている傾向があることがわかる。「１人で遊ぶのが好き」「がまん強い」という２問を肯定する比率（「とてもそう」＋「まあそう」）だけが低い（p.181 基礎集計表）。「がまん強くない」ということはまた、挫折に堪える力が劣り、脆弱であることを指している。これは子どもの数が少ないことや、保護者の子どもへの過干渉と関係があり、今後の教育でとくに注意が必要な点である。

母親の子育て観を聞いたところ、大方がポジティブであり、積極的であることがわかる（p.70 図２－１－１①～⑦）。ただ、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」か、それとも「母親がいつも一緒でなくても、愛情をもって育てればいい」かについてだけは、「子どもが３歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と考えている母親は54.6％で、現代の若い母親の子育てを反映しており、以前の献身的な考え方が薄れつつあるようである。また「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」を選択した母親は60.4％である。この２つの項目は相互に裏づける結果を示している。

４．母親の仕事と子育て意識

（１）母親の負担は非常に重い

調査対象のうち「常勤（フルタイム）」で働く母親は63.0%、「専業主婦」は23.0%である（p.10 表Ｂ－１）。平均して「週５日」働く母親が82.7%で、「週６日」は11.8%である。大方は「18時台」（30.7%）や「19時台」（29.0%）前後に帰宅する（p.175 基礎集計表）。94.2%の母親が外で働くことを夫が理解（「とても理解してくれる」64.4%、「まあ理解してくれる」29.8%）してくれていると考えているが、子どもの世話をしながら仕事もする台北の母親の負担が非常に重いのは明らかである（**図10**）。

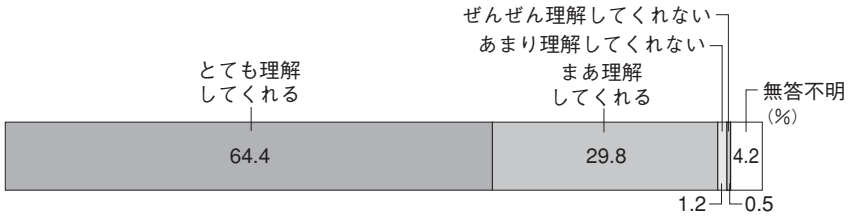
（２）子育てに対して母親はポジティブに考えている

アンケートでは、「最近、次のようなことをお感じになることがありますか」という子育て意識に関する質問（p.78 表２－５－１）、および現在の生活や子どもの成長に満足しているかどうかという質問を母親にたずねた（p.83 図２－６－１～２）。調査結果から子育てに対して、台北の母親は比較的ポジティブで、子育てに自らの責任を感じていることがみてとれる。

上記の12項目のうち、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」という質問に71.7%が思うことがある（「よくある」＋「ときどきある」）と答えていることを除いて、台北の母親はその他の項目ではポジティブな考えが比較的多い。台北の母親が育児に不安を抱いていながらも、子育てに自信を持ち、ポジティブでかつ積極的に責任を担っていることがわかる。

■図 10　仕事に対する夫の理解度（台北）

●夫はあなたが仕事を持つことをどの程度理解してくれますか



注）常勤者およびパートタイムの母親の回答のみ分析。　（サンプル数 1244人）

５．父親の家事・育児への参加状況

（１）父親は家事にはあまり熱心ではない

調査は、台北の父親は通常母親よりも帰宅が遅く、「18時台」から「20時台」の間に帰宅する父親が55.9%しかいないことを示した（p.87 図３－１－１、「18時台」が13.6%、「19時台」が24.9%、「20時台」が17.4%を占めている。ただし、全体の中で「無答不明」が13.4%を占めている）。家事への参加状況については以下のとおりである（p.89 図３－２－１）。

ここから台北の父親たちは家事への参加があまり熱心でないことがわかる。毎日の仕事時間が長く帰宅時刻が妻たちより遅いことと関係があるのかもしれないし、東洋に根強い「男は外、女は内」という伝統的な考え方とも関係があるのかもしれない。そうではあっても、父親の家事参加に対する母親の満足状況をみれば、58.5%が満足している（「とても満足している」12.5%、「まあ満足している」46.0%）。しかし、もっと家事に参加してほしいと考えている母親も93.4%に達している（「とてもそう思う」47.0%、「まあそう思う」46.4%）。台北の父親たちは、もうひとがんばりして、さらに家事参加に励まなければ、妻たちに満足してもらえないようである（p.94 図３－３－１～２）。

（２）父親は育児参加には熱心である

台北の父親のかかわりをみると、育児に対しては家事よりも熱心なことが調査によってわかった。以下は父親の育児への参加状況である（p.91 図３－２－２）。

このデータからみると、「子どもを寝かしつける」ことを「ほとんどしない」という比率が少し高いのを除くと、他の育児参加項目に父親が「ほとんどしない」比率は低い。台北の父親たちは育児参加には熱心なようである。さらに調査結果から明らかになったのは、68.0%の母親が父親の育児参加に満足していることである（p.94 図３－３－３、「とても満足している」13.5%、「まあ満足している」54.5%）。そして97.0%の母親は父親がもっと育児に参加してほしいと考えている（p.94 図３－３－４、「とてもそう思う」59.5%、「まあそう思う」37.5%）。これは、台北の父親は育児にかかわるべきであることをはっきり表している。男女平等法が公布されて、社会全体で男女平等共同参画がさらに強調され、共に働き共に楽しむという意識がこれからの皆の努力の方向であることを示している。

６．社会における子育て支援状況

（１）子育て支援サービスに対する母親のニーズは多様である

子育て支援についての質問で「仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）がいます（あります）か」とたずねた（p.98 図４－１－１）。「いる」と答えた80.2%の母親のうち、34.2%が子どもの「父親」に預けていると答え、「父方の祖父母（母方の祖父母）あるいは親戚」（台北の場合、祖父母と同居はしていないが、幼稚園・託児所から帰ってから祖父母の家あるいは親戚の家に預かってもらうことが多い）と答えたのは77.3%で、「幼稚園・託児所の一時託児」は16.1%であった（p.101 図４－１－３）。その16.1%の回答は、これら家庭の子どもは保育時間終了後も幼稚園あるいは託児所に引き続き世話してもらっていることを示している。というのは、台北の私立幼稚園や託児所はどこも延長保育を行っているから

であり、一部の保護者は仕事が終わるのが遅く、延長保育の費用を支払って18時前後に子どもを迎えに行くのである。

子どもが家を出る時刻をみると、「８時頃」(35.0%）から「８時半頃」(32.1%）に集中している（p.49 図１－１－７）。それより早い「７時半以前」はおよそ17.4%である。つまり保護者の出勤時間に合わせて、早く家を出ないといけないであろう。一方、子どもが幼稚園から帰宅する時刻は大方が16時頃から17時頃（「16時頃」11.6%＋「16時半頃」16.7%＋「17時頃」18.1%＝46.4%）に集中している（p.50 図１－１－８）。そして17時半頃以降も44.1%（「17時半頃」17.3%＋「18時頃」12.9%＋「18時半頃」9.6%＋「19時以降」4.3%）である。ここから幼稚園や託児所、子どもの父親、父方の祖父母（母方の祖父母）あるいは親戚がみな育児支援の担い手であることがわかる。

（２）母親の幼稚園・託児所への要望は切実である

幼稚園・託児所への要望について「自由な遊びを増やしてほしい」や「子育て相談ができる場所になってほしい」などの10項目をあげ、母親に回答してもらった。調査結果からわかった母親のニーズをみてみよう（p.103 図４－２－１）。

このデータからは、母親の幼稚園・託児所への要望がとても多いことがわかる。「子どもが病気の時に、預かってほしい」(28.5%、「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）の項目のみ、およそ７割の保護者が疾病対策の観点から病気の子どもを登園させることに反対しているが、それ以外の大部分の項目でいずれも幼稚園・託児所の協力を積極的に望んでいることがわかる。現代の幼児教育機関が保護者のニーズをどれだけ満足させるべきなのかは、さらに検討を加える必要がある。台北の幼稚園·託児所は親業相談や親業教育に対し、実はなかなかよくやっている。ただ、母親が一方で「知的教育を増やしてほしい」と希望し、一方で「自由な遊びを増やしてほしい」「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」と願っているため､幼稚園・託児所での時間配分について、保護者と保育にあたる担当者がじっくり話し合っていく必要がある。

７．台北の幼児生活における解決を急ぐべき問題について

台北は台湾の政府が存する主要都市であり、人々の資質も一二を争い、経済、文化、教育活動のさまざまな分野がこの地で育まれ発展してきた。人々の生活レベルも高く、教育水準も高い。国際交流も盛んに行われる。しかし、それに応じて子どもの教育問題もその影響を受ける。台北のこのような環境から受けたよい影響は子どもの視野が比較的広い点である。マイナスの影響は保護者の仕事が忙しくて親子コミュニケーションのチャンスが少ない点にある。加えて社会の変化が急激なため、教育政策と保護者の意識が時代の動きに必ずしもついていっていないのである。そこで多くの問題が生まれている。ここに重要な課題を以下に挙げる。

（１）少子化、高齢化および新たな移民子女の増加問題

台北の少子化と高齢化の問題はすでに「台北における就学前教育の状況」(p.40）で述べた。

もう１つ、本アンケートの調査項目にはないが、取り上げるに値する問題がある。それは新移民の子どもが増えている問題である。近年、政府が台湾籍の男子と東南アジア地区出身の女子との婚姻を認めたことにより、新移民の子どもが増えている。2003年の統計に

よれば、新生児８人のうち１人は外国籍の配偶者から生まれた子どもである。これら新移民の子どもがますます多くなっている。その母親の文化的背景はさまざまであり、父親はまた多くが経済的弱者の層に属している。これら新移民の子どもの学習環境や社会生活への適応をいかに支援するか、教育の重要課題になっている。

（２）幼児教育機関が多様であることと幼児教育の質にばらつきがある問題

台北の６歳以下の幼児が在籍している幼児教育機関は、「台北における就学前教育の状況」（p.40 表５）にあげたように、幼稚園、託児所、短期補習塾、幼児託児保育センター（別称、安親班）などがある。それぞれ主管機関が違い、依拠する法律も異なっている。設置条件にも格差があり、利用する機関によって受けられる教育の質も違ってくることになるため、改革･改善が急がれている。

政府はこれを受け、問題解決のために幼稚園と託児所を統合する「幼託整合」（幼保一元化）に対する検討を行った。2007年７月に「幼児教育及び保育法」と幼児園設立登録規範を公布し、託児所設立登録を一時廃止する予定で、幼稚園と託児所の「幼児園」への統合を開始する。「幼児園」は２歳以上６歳未満の幼児を受け入れ、教育部門が主管する。２歳未満の幼児の受け入れ機関は「乳児託児センター」として社会行政機関が主管することになる。「幼託整合」の事業は広い範囲にわたり、多くの関連措置が必要になる。2009年までの達成を目指しているが、いまだに草案の段階であり、変わりうることが多いかもしれない。

（３）母親の子育てに過度の不安と、意識と行動の不一致がみられる

今回の調査は、台北の幼児をもつ母親の子育てには過度な不安がみられることをはっきり示した。母親は子どもにたくさんの習い事をさせたいと望んでいる。とりわけ台北では小学校１年生の教育課程に英語が加わってから（台湾の他の県や市では、多くが小学校３年生になってから英語の授業がある）、保護者は先を争って子どもに英語を学習させ、「すべて英語」（一日中英語を用いて教育し、No Chinese を標榜する）の幼稚園に入園させようとさえする。英語だけを教え、幼児教育の本質をおろそかにするような、この種の変形した幼児教育機関が子どもに与えるマイナス影響には、注意が必要である。このほか、子育てにおいて、保護者は何を重要と考えるかという認識について、一方では人格や教養を重要だと考え、大自然への接触や戸外活動は子どもにとって成長の助けになると思っている。だが、一方では、子どもの大学、大学院への進学を望んでいるため、幼児教育機関に知的教育活動を多く行ってほしいと希望している。「学業成績は子どもの成功への道を開く鍵である」とみているのである。このような非常に矛盾した現象に対して、さらに研究する余地があり、改善の方向を探らなければならない。

（４）幼児の学習へのプレッシャーを軽減させなければならない

台北の幼児たちは遅寝であり、テレビ視聴は彼らの共通の好みである。保育時間終了後には習い事や英語を学ぶ。保護者は彼らにたくさんの期待を抱いている。多くは夫婦共働きの家庭であり、すなわち父母がいずれも外で働き、朝早く家を出て、夜遅く帰宅するので、親子で共に過ごす時間は限られている。外国籍のお手伝いを雇って子どもの世話をさせ、送り迎えをさせる家庭もある。メディアや科学技術の発達に伴って、台湾の幼児は科学技術や学業を非常に重視するようになっている。アジア幼児チャンネル（Cartoon Network）の2005年の調査によれば、10世帯中９世帯はパソコンを所有し、70%の人が家

でインターネットを利用している。台湾の幼児は電子機器の愛好者であり、学ばなければならない事柄が山のようにある。進学至上主義が社会全体に充満していて子どもが受けているプレッシャーの重さも想像に難くない。それをいかに軽減するか、教育関係者、保護者および教育政策にかかわる人たちの深慮が待たれる。

【参考文献】
楊国賜ほか 2002『全国幼児教育普査計画成果報告』国立嘉義大学。
蔡春美ほか 2000『幼児教育機構行政管理』心理出版社。